ふわふわ。

水無月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふわふわ。

【Ｎコード】
Ｎ２７９３Ｐ

【作者名】
水無月

【あらすじ】
私には好きな人がいる。幼なじみの私と同じ女の子。この気持ちはずっと変わらないって思ってた。だけど高校生になった私には気になるヤツがあらわれた。

はじめに

私の名前は水原葵。１５歳。高校1年生の女の子。
こんなことを自分で言うのもアレだけど成績優秀でスポーツも得意。
みためだって悪くないほうだ。小・中学時代はよく告白された。
これだけ聞くと悩みなんてなくて毎日が楽しくてしょうがないって思われちゃうかもしれないけど、私にだって悩みはある。
好きな人がいる。幼なじみで、ずっとずっと片思い。なんだ普通じゃんとか思わないでほしい。だって、その人は私と同じ女の子だから。

高校生

「お姉ちゃん、心ちゃん待ってるよ。」ドアの向こうで蒼佳（あおか）がせかしてくる。時計に目をやると確かに待ち合わせの時間どうりだ。もう一度鏡の前で全身をチェックし、深呼吸して「大丈夫」とつぶやく。

玄関のドアを開けると、幼なじみの斉藤心（さいとうしん）が鏡を見て髪を整えていた。私を見て慌ててカバンにしまう。

「おはよう葵。」

ニコッと笑う。まるで地上に舞い降りた女神のようだ。私と同じ制服でも心が着ると、心のために作られたかのようにぴったりとにあっている。

腰までのばした栗色の髪。ぱっちりした目。白い肌。シュッとした体のライン。少女漫画のヒロインになれそうだ。夢見心地になってしまう。

「はやく行こう。入学式で遅刻はいやだよ？」

私の女神に手をぐいっと引っぱられてもまだ、夢からさめる事ができない。こんな朝がまた3年つづけられる。「幸せだなぁ。」小さな声で、思わずつぶやいてしまった。

葵と心

私と心は家がとなりどうしの幼稚園からの幼なじみだ。気がつけば一緒にいたし、それが当たり前になっていた。小学校になれば、もちろん一緒に行って帰ってくるし、中学校になれば部活を同じのにした。クリスマス、お正月・・・私たちは家族みたいに家を行き来した。

まわりから見れば本物の家族みたいに仲のいい幼なじみの2人。なんだと思う。実際に私もそう思っていた。あのときまでは。

「葵、風が気持ちいいね。」

ハッと現実に戻る。春のやわらかい風に心の長い髪がゆれる。かすかに心のニオイがした。トクンと胸がせつなくなった。

「そうだね。」

はずかしくて顔を見ることができなかった。報われないとはじめからわかっている。でも、どうしてもあきらめられない。

私は恋をしている。女の子に。

心に恋をしている。

気づいた思い

中学生のある日、心は男子から呼び出しをうけて美術室に行っていた。心は本当に可愛くて学年のアイドル的な存在だった。だから呼び出しなんて普通のことだった。

いつもならすぐに戻ってくるのに、その日は少し遅かった。不安になって教室からぬけだし、美術室に小走りで向かう。ドアを開けると油絵の具のニオイがあふれてきた。が、誰もいない。この不安な気持ちは気のせいかとホッとして教室から出ようかと思ったとき、教卓あたりで何かが動いた。ビビりながらそっと近づき思いきりつかんだ。

息をのんだ。心だ。心が上半身下着でふるえている。乱れた髪。涙の跡。腕のあたりが赤くはれていた。

「あ・・おい」

そう言うと私の胸にとびこんできて壊れたみたいに泣きだした。心と相手の男の間で何がおきたかは分からなかったけど、何をされたのかは分かった。

やるせない思いがこみ上げてきた。相手の男には十分腹が立つけど、一番腹が立つのは自分に対してだった。・・・一人で行かせるんじゃなかった・・。心臓をえぐられたみたいに体が熱くなって、胸の中で泣きじゃくってる心が、急に愛しくて愛しくてどうしようもなくなった。ふるえが止まるまで力いっぱい抱きしめた。

どのくらい時間が経ったんだろう。心のふるえもおさまっていた。私のブレザーを肩にかけ、立たせた。とりあえず保健室に行こうと歩き出そうとした時、心が引っぱってきたから転びそうになった。見ると私の顔をじっと見て何か言おうとしている。でも言葉にできないんだろう。沈黙が続いた。その姿がツラくなってきて私はまた、抱きしめた。

「大丈夫。私がいるから。」

精一杯だった。その後の心の表情は、あえて見ない事にした。
その日はずっと体が熱かった。心の事が愛しくて、私が守らないと消えてしまいそうな女の子に思えた。理不尽にも、このとき私は心に心（こころ）を奪われてしまったのだ。
心の髪も指も放つニオイも言葉も、全てが私のものになればいいのに。そう思わずにいられなかった。

忘れていること

高校生になって3ヶ月が過ぎようとしていた。最近一日が早くかんじる。これもクラス委員になってしまったからなのか。新しいクラスが同中出身が多く、「水原さんが適任でーす！」なんて言いだしやがって、反論むなしく無理やりなってしまった。まぁ別にそこまで嫌じゃないし、やりとげた後っていうのはなんとも気持ちがいいもんだし。

副委員長は同中らしいけど、こんなやついたっけか？茶髪でピアスで見た目チャラいけど、口数は少なくて礼儀正しいし、頭も悪くない。運動はダメらしいけど。なんか聞いたことある名前だけど思いだせない。委員になってから一度も二人っきりでしゃべった事ないし、むこうはなんか私のことをさけてる感がある。まぁ、いいんだけれど。

そして書記は心だ。立候補って・・・。心がこんなめんどくさい役やるのは意外だ。もっと華やかなのが似合ってるのにな。でも一緒にいられるのはうれしい。

「ねぇ葵、どう思う？」

やばい。話きいてなかった。なんだっけ？心が記録してるノートを見ると、《夏といえば、おばけ、祭り、カキ氷》と書かれている。なんのこっちゃ。

「ええっと、いんじゃないい？」

適当・・・。

「本当にいいの？肝だめし大会？神社で？本当に大丈夫なの？」

心がずいっと近づいてくる。神社で肝だめし？なんじゃそりゃ。いつの間にそんな事になったんだ。

「まぁ、でも親ぼくを深めるんだったらいいのかな？神社に迷惑じゃない時間にやらないとね。」

決まったのか？放課後に私と心と副委員長が残って、クラスがより

一層仲良くなる為に、夏休みに何かやりたいという話になり、ここにいる。肝だめしかぁ。悪くないけど副委員長はそれで大丈夫か？
「まずは担任に聞いてからだな。じゃないと後からダメってなったらめんどいし。」
一人で進めようとする心を促す。そっかぁ・・と言って教室から出ていった。パタパタとろうかを走る心の足音が遠くなっていく。
シンと静まる教室。気まずいな。なんか話さないと・・。副委員長は帰る仕度を始めてしまってるし、どうしようか・・・。
「あのさ」
口からつい出てしまった。まだ言うこと決まってないのに！バッと、びっくりしたようにふり向かれた。なにかを期待されている目。
「あのさ、同中だったんだよね？私のことおぼえてる？」
がっかりした表情だ。なにか悪いこと言ったかな。はぁ・・と、ため息をされる。
「水原さんは俺のこと、全然覚えてないかんじですね。」
ツンツンした言いかただ。怖い顔をしている。
「名前は間仲昴（まなかすばる）です。中学では黒髪でメガネで背はもっと低かったです。3年間、水原さんと同じクラスで、一緒に体育祭の委員もやりました。それに一度・・」
一度・・なんだ？言葉に詰まっている。ヴヴンっとせきばらいをし、キッとこっちをみる。
「一度あなたに告白して、フラれてます。」

ふたり

たしか、そうあれは中2の体育祭の実行委員のときで、確かに私は間仲と一緒に実行委員をやって、放課後の準備のときに告白された。でも私が覚えている間仲は、こんなチャラいかんじじゃなっかた気がする。目の前のコイツが言うように黒髪メガネで私より背が低かったし、もっと小動物みたいな目で見るような、おとなしいやつだった。でも今、目の前にいるのは茶髪ピアスで、私より背が高いチャラいかんじの今時の男の子だ。そんなヤツに、はい僕がその間仲ですけどなんで分かんないんですか？なんて言われても分かる訳ないっつーの！

「本当に、あの間仲なの？」

おそるおそる聞く。

「そうです。信じられないなら告白した時の状態を1から10まで再現してあげてもいいですけど？」

うわっ。覚えてるって、完全に根にもってるよ。

「いや、いいです。信じてます。再現してくれなくてもちゃんと覚えてるんで大丈夫です。」

まぁ分かんなかったのは失礼だと思うけど、こんな風に扱われる事でもないと思うんだけど。ちらっと見ると、帰り仕度の続きを始めだした。さすがにこれで帰られると明日から気まずいよな。

「間仲ごめん。だってあの頃と全然ちがうんだもん。私が悪いから許してくんない？」

反応なしって。シカトって・・。じゃぁ、

「本当っにすみませんでした。3年間同じクラスだった人わかんないなんて最低です。どうぞお気のすむまでののしってください。」

これでどうだ。こんなに謝ってんだから、もういいだろう。5秒程の沈黙をやぶったのは教室中にひびく間仲の笑い声だった。

「あはっはははは・・・はぁ・・・そこまでやりますか！？普通

！？あーもう、ののしってくださいってマゾですか水原さんは？別にそこまで怒ってないですよ。ちょっとすねただけです。まぁ俺って気づかれなかったのはちょっとショックでしたけどね。」
そう言うと急にまじめな顔になって私の髪にふれ、少し悲しそうな目をした。ドクンッと胸の奥が大きくはねる。今まで感じたことのない感情が体中をかけめぐる。少し髪にふれられただけなのに、体中が熱くなる。
「俺のこと忘れてるようじゃ、あの約束だって覚えてないですよね？」
ふれてた手を下ろし、くるりと背をむける。約束？私は約束をしたのか？
「いいんです。見た目がかわっても中身はへたれのままですし、水原さんはモテる人ですし・・・。」
間仲との約束・・思い出せ私。あの時なんて言った？
「でも、ちょっとは期待してたんですよ？変われば水原さん声かけてくれるかなって・・」
声を、かける？
「高校生になって背ものびて、かっこよくなって、そしたら・・」
かっこよくなって？
「そしたら水原さんと友達になれるかもって・・」
カチッとパズルのピースがはまるように、記憶のかけらが一つになった。そう、私は間仲に告白されたときに、こんな事を言ったんだ。あの日、フッたときに間仲が泣きそうになるから
「もっとかっこよくなって、しゃべりやすい雰囲気になったら付き合うとかは無理でも、友達にはなれるかもしれない。」
私はそう言った。あの時はなだめるのに必死で、とっさに出た言葉なのに、それをずっと覚えていて実行するなんて・・・。
ぎゅっと手に力がはいる。私の言葉をまっすぐ受け止めた間仲。私はまた泣かせてしまいそうになっている。でも今から言う言葉はあの時みたいに、とっさに出るような軽い気持ちで言うものじゃない。

深呼吸して、まっすぐ間仲を見る。
おわび？約束？違う。今、こころから思ったこと。
「間仲、私と友達になってよ。」
ふわっと風がふき、カーテンをゆらす。間仲の背中の夕日がまぶしかった。

逆行で表情はよくわからなかったけど、うなずいてくれたように見えた。なんか照れくさいけど、私の気持ちはちゃんと伝わっただろうか。そうだったらいいな。友達・・新しい私の友達。

「あのさ水原さん、俺・・」

間仲が言おうとした時、教室のドアがガラッと勢いよく開いた。心が帰ってきた。足音に気づかなかった。

「遅くなってごめんね。先生なかなかＯＫしてくれなくてさー。でも、ちゃんと最後にはしぶしぶ了承してくれたけどね。」

フフフっとうれしそうに笑って私の顔をのぞきこむ。

「どうしたの？顔赤いよ？二人とも。」

どうしたの？・・どうしよう。なんて説明すればいいんだろう。最初から言ったらいいのか？間仲とは過去に告白したりされたりした仲で、約束をしていて、髪にふれられて、体が熱くなって、友達になってほしいと言って、それから・・。

ちらっと間仲を見る。ほんとだ。よく見ると少し赤い。もしかして私と同じで照れてるのかな？まさか。

「私たちしゃべったら意外と気が合っちゃってね。ほら、クラス委員同士なのに話す機会なかったし、あれだよ、あれ。仲間ってかんじ？これからクラスを盛り上げようとしてる同志みたいな？」

口をポカンと開けてる心。なんかあせってしゃべるほど、おかしな方向に進んでる気がする。同志って・・。とりあえず出よう。このままいても変なこと言いそうだし。

「じゃあ間仲、そういう事でまた明日。」

心をつかんで教室を出た。そういえば、さっき間仲がなにか言おうとしてたけど何だったんだろう。

帰り道、心はなにもしゃべらない。あんなにおしゃべりな子なのにどうしちゃったんだ？おそるおそる覗きこむと、すっごい怖い顔し

てブツブツ言っている。どうしちゃったの？
「あの、心さん？どうしたの？なんか怒ってる？」
そう言うとキッとこっちを強い目で見て、ずずいとせまってきた。
怖い！！
「間仲くんと何があったの？気が合ったってどういう事？あたし達、親友だよね？あたしの事どっかおいて行かないよね？・・・」
目から涙がポロポロこぼれてる。心・・
「一人にしないで。」
怒ってるんじゃなっかた。不安にさせてたんだ。私たちはとても近い存在で、ずっとずっと2人一緒にいて、それがあたり前だった。今までと違う私を見て不安にさせてたんだ。私が急にあんな事言うから。一番大スキな人を、こんな不安にさせてるのに気づかなかったなんて・・胸がギュッとなる。間仲にドキッとしたりして、どうしっちゃってたんだろう。
「ごめんね。泣かないで、心。」
抱きしめる。小さくて、守ってあげないと消えてしまいそうな心。
私がそばにいないと。
「大丈夫だから。どこにも行かないから。」
その日、間仲と友達になったとは言えなかった。

今日から夏休み

「えー、今日から夏休みとなりますが、はめをはずさず、勉強や部活と充実した休みを過ごしてほしいと重います。９月にまた皆さん元気にお会いしましょう。」
校長先生の話って、なんでいつも長いんだろう。完全に立ちながら寝てる人いるし。とはいえ今日から夏休み。そう夏休み・・。何しよう？心と買い物行ったり、お祭り行ったり、海もいいよなぁ・・。心とやりたい事だらけだけど、まず、アレをかたづけないと。
「では皆さん先日も言いましたが、今夜８時からＨ神社で肝だめしやります。一応、今出席をとりますけど急に来れなくなったり、逆にきても大丈夫です。」
そう、例の肝だめしだ。幹事はやっぱり色々と忙しいもんで、やる事がけっこうあった。
ちらっと心を見る。アレ以来、間仲の事を聞いてこない。あんなに泣くのを見るのは中学のあの時以来だ。胸が少しチリッと痛くなる。ダメダメあんなの思い出しちゃ。絶対に。今は目の前の事に集中しないと。
「葵、出席とれたよ。みんな来れるみたい。」
無理していつも通りなのか、本当にいつも通りなのかわからない。間仲とはなんかバタバタして話してないし、落ち着いたらもう一度心と話し合いたい。ちゃんと話せば不安になったりしないはずだ。心は私の大切な人だ。泣かせたり、不安にさせたりしたくない。ニコッとかえす。
「よかった。じゃぁ皆さんいったん解散です。また８時にお願いします。」
何はともあれ今日から夏休み。高校１年の夏が始まる。

友達のつくりかた

夜の神社はやっぱり怖い。ごめんなさい神様。ちょっとだけお邪魔します。
最初にしっかりお参りをする。皆だんだん集まってきた。私と心は1番のり。間仲は欠席らしい。副委員のくせに。
皆くじ引きをひきおわる。私と心は責任者だから行くことはできない。
「葵、こっちこっち！」
手をふっている。何かあったのかな？でも、なんか嬉しそうにしてるから問題がおこったってワケでもなさそうだ。
行ってみるとウチのクラスで一番目立つ女の子達といる。千咲さんと清水さんだ。
「どうしたの？なんかあった？」
ふふふ。といじわるそうなふくみ笑いをしているだけで、言おうとしない。二人の方を向くと、大人っぽい千咲さんが口を開いた。
「斉藤さんから聞いたんだけど、2人って幼なじみなんだってね。まぁ、よく一緒にいるから知り合いだと思ってたけど。で、水原さんの話になってさぁ・・。」
千咲さんの口元がゆるむ。まさか心のやつ私の秘密とか言ったんじゃないだろうな！？バッと向きなおって心のほうを見たけど、遅かった。どっかに行ってしまった後だった。
「あんたもオバケとか怪談が苦手だって聞いたよ。アタシもなんだよねぇ。」
となりにいる清水さんが、ちょっとなれなれしく来る。千咲さんは笑いを押し殺してるみたいだけどバレバレだ。なんか失礼な人達だ。私にだって苦手な物ぐらいある。
「まぁ、そうだけど。千咲さんはそんなに笑わなくても。」
「だってさぁ、オバケ怖いのに肝だめしする？委員長の権限でなん

とかなんなかったワケ？」
押し殺すのをやめたらしい。ゲラゲラと大声で笑いだした。だって雰囲気が、もうそんな感じになってたし。
「まぁ、でも水原さんがオバケ怖いとか思わなかったよ。完璧な女像はくずれたけど、こっちの方がいいんじゃん？なんとなく親しみやすくってさ。」
そうそう。と清水さん。ポンッと肩をたたかれ、ニッと笑う2人。つられて笑ってしまった。私だって2人がこんな人だとは思わなかった。すごく親しみやすい人達だ。今まで心以外の人と接する事が少なかったから、こういう感じ新鮮だ。ちょっとはずかしいかんじ。
「あたし千咲薫（せんざきかおる）。薫でいいよ。」
薫。ちょっと強引だけど、大人っぽい雰囲気。
「アタシは清水奈緒美（しみずなおみ）。薫からはナオって呼ばれてる。他はそのまま奈緒美かな？あんたは？委員長さん。」
奈緒美。よくしゃべるし、話をどんどん前に進めていくマイペース。
「葵でいいよ。奈緒美、薫、よろしくね。」
友達って、こんな感じでできるんだな。

報告

「心、さっきありがとう。」
やっと見つけた。石段に座って、肝だめしにスタートしたグループのチェックをしていた。
夜風が涼しい。心の長い髪をゆらして、私の鼻をくすぐる。
「なんのこと？」
こっちを見ずに目線を落としている。知らないフリをするとき、心は下手くそだ。さっきの薫と奈緒美の事だって、クラスで友達がいない私を見て二人に話をしてくれたんだと思う。気が合いそうな、あの子たちに。その光景を思うと、ちょっとキュンとしてしまう。いつもそうやって心配してくれて、私のことを考えてくれている。うれしい。
友達と言えば、間仲の事をまだ心に言っていない。なんか気まずくてあのままだった。今なら二人きりだし、言える気がする。
「あのさ、間仲と友達になったんだよ。」
動きが止まった。顔は下を見たまま。
「薫とナオは？」
「もちろん、友達になったよ。」
小さな声で、そうかぁ。と聞こえた。なんかまずかったかな？心はそこら辺にあった小さな枝で地面になんか書きはじめた。
（あおいからまなかくんにいったの？）
ハッと心を見るけど、下を向いたまま続きを書きはじめる。
（まなかくんからいったの？）
胸がギュッとなる。なんて言えばいいんだろう。こんな時、自分の思ってることを完全に伝えるにはどうするのが一番いいんだろう。
落ちてる木の枝で地面に書いてみる。
（しん、だいすきなしんゆう。まなか、かおる、なおみともだち）
本当だけど、少しウソ。心は大好きな人。恋愛感情で。でも言える

わけがない。困るのわかってるし。一番伝えたい人に何も伝えられないもどかしさ。だから親友ってウソをつく。一番だいすきだよ。心。

こくこくとうなずいてくれた。誰も見えない位置で、私たちは手をつなぐ。

海で

ザザンッと大きい波の音をかんじる。キラキラとつぶが、夏の太陽にまぶしく光っている。

「夏休み、女2人で浜辺かな。」

プッと隣に座っている薫が笑う。千咲薫・・。私の友達だ。大人っぽくていつも冷静に奈緒美をつっこんでいる。年上なかんじがする薫は、私たちを保護者みたいな顔して見守っている。

「しょうがないじゃん。ナオと心が補習なんだし。あと1時間もすりゃ来るよ。」

なにが楽しくて地元の海に女2人で浜辺に座っているかというと、補習組の斉藤心と清水奈緒美を終わるのを待っている。奈緒美がどうしても4人で行きたいって言い張るし、明日から言い出した本人はバイトが始まるし、薫は旅行に行っちゃうしで今日しかない。と言うわけだ。

日陰に移動する。さすがに暑いし、日焼け止めぬってもこれじゃ意味ないし、のど渇いた。

「わがままなんだよ。ナオは。あたし達だって学校で待ってればいいのに、海で待ってろなんて。しかも水着でさ。なんで地元の海で泳がなきゃいけないのよ。」

そう言いながらちゃんと待っている薫は、やさしいんだと思う。服着てるけど。

「ねぇ、君たち泳がないの？」

顔を上げると知らない男たちが話しかけてきた。ナンパか・・。

「君は大人っぽいね。いくつ？高校生？わけぇ。君も高校生？2人共キレイ系だねー。」

薫を見ると、あからさまにウザがってる。こういうの嫌いそうだもんな。しょうがない。

「ごめんなさい。あたしたち連れを待ってんだ。男。」

ぐいっと薫をつかんで、その場からはなれる。こんなに分かりやすくしてやったから向こうも気づいただろう。今年になって何回目だろうか。腕をはなす。薫は海を見ている。
「あんたって、男いんの？」
なんて、どストレートな質問なんだろう。薫は聞きたい事を相手の様子をうかがって聞いたりしない。知りたい事をそのまま聞いてくる。裏表なくて、そういう所が好きだ。急に風が勢いよく吹いて、薫の長い髪が乱れて顔がかくれた。ポケットに入っていたシュシュを渡す。
「まさか、いないよ。薫はいるの？」
「あたしもいない。」
そろそろ心と奈緒美が来る頃だ。分かりやすい場所に移動した方がいいかな。歩き出す。
「葵ってさ、気がきくよね。特に心にはさ。それって友達で幼なじみだから？もしくは生まれつき？まぁ、でもあんた達見てると友達っていうより、もうちょっと違うのに見えてくる。」
真剣な表情。
「ほめてくれてんのかぁ。ありがとう。」
歩調を早める。薫はよくみんなを見ている。きっと私の事も今までより距離が近くなった分、より見てるんだろう。・・なんかこれ以上はヤバイ。
「話そらさないでよ。聞きたいのはつまり、心とはどういう関係ってこと？」
もう一度、強く風が吹いた。今度は顔がよく見える。じっと私を見る目。きっとごまかしはきかないんじゃないかな。でも、それでも知られる訳にはいかない。だって理解されないと思うし、知られたら友達でいるのは難しいと思う。
波の音がさっきより大きく聞こえる。

薫と葵

「はぁ？何その質問。私と心の関係ってさぁ・・・そりゃぁ友達でしょ。くされ縁とも言えるかもね。長い付き合いだから家族みたいなもんだよ。」
キッとにらんでくる。私もウソはうまくない。たぶんバレバレだと思うけど、知られるわけにはいかない。
「あたし、アンタのこと好きだよ。」
腕を組んでまっすぐ見てくる。突然の事すぎて返す言葉が見つからない。しどろもどろしてると薫の顔がどんどん赤くなってくる。
「バカ！！友達としてだよ。なに勘違いしてんの！？友達として好きなタイプって言ってんの。やめてよ！はずかしい。」
びっくりした。ちょっとあせった。さっきまでのピリピリした空気が和らいで、ホッとする。
薫にはきっとウソつけないな。きっと。いっそ本当の事を打ち明けられたらどんなに楽か、考えなかった訳でもない。でも、今まで築きあげてきた関係が音をたてて崩れていくに決まっているから、分かっているから言える訳がない。自分の気持ちを言えないで苦しむのは、もう慣れたから耐えられるけど、言った事で避けられて一緒にいられないのは耐えられない。大事な想い。誰にも言わないで、1人で胸の中にしまってきた私の想い。心が私の事を万が一、億が一、好きになってくれるまで絶対に言わない。そう決めた。
「仮に私が心に特別な気持ちをもっていても、一番最初にそれを口にするのは心の前だと思う。」
勘のするどい薫ならきっと気づくだろうな。今のでわかっちゃたよね？ばれっちゃったよね？私バカだなぁ。なに言っちゃってんだろう・・・。否定し続ければいいのに、なにばらすような事言っちゃって、バカだな私。薫きっと気持ち悪いって思ってるよね？だって女が女を好きなんて普通じゃないもん。私だって分かってる。だけど

好きなんだもん。ずっと好きなんだもん。この気持ちはウソつけないよ・・・。
はぁ・・とため息が聞こえる。
「アンタ見てると辛そうなんだよ。心を見る目が。心がはしゃいでるのを嬉しそうに見てるかと思ったら、急に寂しそうな辛そうな感じになるんだよ。一応あたしだって、ナオだって友達だから嫌なんだよ。そういう感じで1人で悩んでるの見んのが。だから・・だからさぁ、なんて言うかさぁ・・言ってほしいんだよ。相談とかしてほしいんだよ。アドバイスできるか分かんないけど、友達なんだから頼ってほしいんだよ。」
以外だ。問いただされてる気分だったけど、違うんだ。心配してくれていたんだ。口は悪いけど、すごい優しくてアツい奴だったんだ。
「ありがと。」

海の家あたりに心と奈緒美が来たのが見える。涙が出てきそうなのをこらえて大きく手を振る。奈緒美は制服を脱ぎはじめた。心が必死に止めているけど、下に水着を着ているらしかった。その光景を大笑いしながら薫と見ていた。
「楽しいよ。皆といると。」
すごいクサイ台詞言った気がして、はずかしくなって心と奈緒美の元に走っていく。後ろから「あたしもだよー!!」って叫ぶのが聞こえた。はずかしい奴。でもすごい優しくてアツい奴。
キラキラと波の粒がまぶしく光っていた。

妹

紺色にアジサイ柄の浴衣。私の肌と髪の色に合うって心が選んでくれたやつだ。去年買ったのに、丈がもうスレスレだ。これ以上背がのびたら、きっと来年は着れなくなっちゃうだろうな。

「はい回って。腕上げて。ちょっと動かないでよ。このアジサイも今年までの命か。」

ウチのなんでも屋の妹が、帯を締めながら独り言をぶつけてきた。・・・まだ分かんないよ。もう止まるかもしんないし。

同じ物を食べていても私達は見た目も性格も違う。私は身長１７０センチの痩せ型（自慢）で、成績は常に学年３位以内（自慢）だけど、料理・洗濯・掃除とか家に一歩入ると私はなにもできない。蒼佳は逆で、勉強は・・まぁ、できなくもないけど得意ではないみたい。ちっちゃいし、学校ではあまり目立たないようにしてるみたい。でも、あの子が作る料理とかすごい美味しいし、裁縫とかメチャ上手い。掃除は自分で作った道具を使ってる。しっかりしてて、いいお嫁さんになれるだろう。だけど着付けなんて、どこで覚えたんだろう。

「はい終わり！心ちゃん待たせないでね。」

ポンッと背中を押される。昔は蒼佳も一緒に遊んで、私の後を追っかけてきてたのに、今は全然。大きくなるとあんまり喋らなくなっちゃたし、ちょっと寂しい。

玄関を出ようとしてサンダルを履いたけど、ふり返って脱ぐ。

「蒼佳も行かない？」

リビングで片づけをしているみたいで、聞こえてないみたい。なんかまたブツブツ言っている。ばれないように、後ろから静かに近寄って耳元でささやく。

「蒼佳さんも行きませんか？」

たぶん、私はもう出かけたと思って油断してたんだと思う。猫みた

いにギャーっ！！！と叫んで、抱えていた物が宙に舞った。そこまで驚かすつもりはなかったんだけど・・・。
「なにしてんの！？バカなんじゃない！？」
ちょっとなみだ目になって、毛が逆立ってる。
「いや、そういうつもりじゃなかったんだけど、祭り・・蒼佳も一緒にどうかなって。」
はぁーっと深いため息。おとなしい人ほど怒らせると恐いと聞く。この子が怒ったとこなんて見た事なかったから、後ずさりしてしまう。
「15分で仕度するから待ってて。」
くるりと背をむけ部屋に入っていった。
自分で誘ったけど、ちょっと意外だった。言われたとうり15分後、浴衣を着て、髪を上げてちゃんと化粧して出てきた。ビックリだ。こう見ると私に似ている気がする。なんだ。ちゃんとできんじゃん。普段からこうしてればいいのに。サンダルを履くのに玄関に座る。
「全部お姉ちゃんのおごりでいいんだよね？」
今度は蒼佳が耳元でささやいてきた。マジかと思って顔をあげたけど、もう走って行ってしまった。だけど、なんとなくだけど後姿が少しうれしそうに見えた。

祭りと熱と

たくさんのちょうちん、浴衣の人達、活気ある出店のおじさん。夏祭りはなんかすごく気分が高まる。体が少しほてって、頭がボーっとする。これも祭りのせいなのか。

「蒼佳ちゃんと一緒に遊ぶなんて久しぶりだから、なんか緊張しちゃうなぁ。ねぇ、何食べようか？」

浴衣が私服だったらよかったのに。こんな可愛い心が見られるなら。いつも下ろしている髪を、今日はアップにして巻いている。すごく、本当にすごく可愛い。周りの男達がメチャ心を見ている気持ちもわかる。そりゃそうだ。こんなに可愛いんだから。

少し離れた所で2人を見てるときわだっている。なんか別の世界ってかんじ。私が心といる時ってどんなかんじなんだろう。

「お姉ちゃん、心ちゃんと向こうのお店も見に行くんだけど、一緒に行く？」

「いや。ちょっと休むよ。あっちの石段の所にいる。」

ふぅん・・と何か言いたそうだったけど、何も言わず行ってしまった。すぐに人ゴミで見えなくなった。

蒼佳は知っているのかな？私が心を・・・女の子を好きだって知っているのかな？ちょっとコワイ。だってそうでしょ？もしかしたら軽蔑されるかもって思うと、知られるのはコワイ。

考えすぎて、頭がズンズンする。これも祭りの熱気のせいなのか。休もう。あそこの石段なら、あんまり人来なかったと思うし。

ゆらゆらと人ゴミをぬって歩く。目の前がぼんやりとかすんでくる。私どうしちゃったんだろう？体が熱くて浴衣を脱ぎたい。でも体が重くて上手く動かない。足がもつれて石につまずいてしまった。

「大丈夫！？」

やさしく触れる腕が支えてくれたおかげで、顔面強打せずにすんだ。誰？お礼を言わなきゃ・・・でも・・・ムリ。目を開ける事さえツ

ラくて、呼びかけられていてもその声がどんどん遠くなっていく。
「ちょっと水原さん大丈夫!?斉藤さんは一緒じゃないの?・・・・・もしもし斉藤さん?すぐ石段の所に来て。あぁそうだけど、後で説明するから。水原さんがヤバイから早く来て。」
うすれていく意識と視界の中で、見覚えのある顔を見たような気がした。
なたは誰?

祭りのあと

体が熱い。すごっく熱い。それに揺れてる。浴衣だし、苦しいし、頭痛いしメチャメチャだ。
なんかきゅうに情けなく悲しくなってきた。私、なんか色々やんなきゃいけない事から逃げてる気がする。心の事とか、間仲の事とか。心の事、好きだけど・・こんなの絶対むくわれないし、蒼佳にだって軽蔑されるだろうし、ましてや本人になんて言えるわけない。言ったら終わりだ。今まで築きあげてきた信頼も何もかも、崩れてしまうに決まってる。
間仲に自分から友達になってほしいとか言っときながら、それっきり変に意識してしゃべれないし、それどころか目も合わせらんない状況だし、でも他の子達と仲良くしだしてるてるの気になるし、すごく冷たい人間だって思われるだろうし、私はそんなつもりじゃないのに・・。
なんかもうメチャクチャだ。ちゃんと全部、私の気持ち言えたらいいのに。
心に好きだよって、間仲にごめんねって素直に言えたらいいのに、私は・・私は・・・。

遠くから「大丈夫だよ」って聞こえたような気がした。大丈夫、ちゃんと伝わるよ。怖がらずに、こころを込めて言えば、ちゃんと伝わるから、大丈夫。そう言われた気がした。

誰だろう？すごくやさしい温かい声で、安心する。さっきまですごく不安で情けなくて悲しかったのに、体がフワリとやわらかい物に包まれた気分になった。神様かな？なんてね。今はこのフワフワに身をまかせて眠ってしまおう。

どのくらい時間が経ったんだろう？目を開けると自分の部屋のベットにパジャマでいた。部屋が暗いし、今何時なんだろう。よろよろと起き上がって時計を見ると１０時半を指していた。いつの１０時半だ？外は暗い。夜か・・・。
ええっと確かお祭りに行って急に頭が痛くなって、えーっと・・それで・・・・ダメだ。よう分からん。
リビングから人の声がする。蒼佳かな？
そっと入ってみると、蒼佳と心が出店で買った物を食べていた。ぱっと、心と目が合った。びっくりした目をしている。
「葵！？大丈夫なの？寝てなくて！？」
とっさに買ったものを隠してるけど、大量にありすぎて隠しきれていない。
「う、うん。大丈夫だけど、私どうしちゃったの？全然分かんないんだけど。」
「お姉ちゃん、急に熱だして倒れたんだってさ。同クラの間仲っていう人から心ちゃんに連絡はいって、家まで運んでくれたの。ね？心ちゃん。」
「うん・・」とゴニョゴニョしている。マナカ、マ仲、間仲が！？運んだって、そんな！？なんで！？
「間仲くんが、葵のこと助けてくれたの。私は何もできなかったけど、すごく頼もしかったし助かった。」

間仲だったんだ。あの力強い腕は。「大丈夫？」って言ってきてくれたのも。
また体が熱くなってきた。熱まだ残ってるのかも。
「お姉ちゃん、まだ休んだほうがいいよ。心ちゃんは遅いから今日はウチに泊まって。」
蒼佳に促されて部屋に戻ると、へなへなとドアにもたれかかる。間仲・・なんで助けてくれたんだろう。きっと偶然だよね？同クラで通りかかっただけだよね？

ぎゅっと肩を抱く。力強いけど、優しかった間仲の腕。胸の奥がぎゅっとなって痛い。きっと熱のせいだ。

窓の外を見ると、月明かりを強く感じる。今、間仲は何を感じているんだろう。

新学期

暑さの残る9月1日。今日から2学期が始まる。日に焼けた子とかいて、みんなけっこう遊んだんだなぁ。

「よ！お二人さん久しぶり。残暑がきびしいですなぁ。」

ひらひら手をふる奈緒美は意外に白いし、薫は黒くなっている。逆だと思ってた。

「ナオはずっとバイト？薫は旅行どうだったの？」

心が2人にかけよって、夏休み中の話で盛り上がる。
心は今年は楽しかったんだろうか。去年までは私は、毎年変わらない、心だけと過ごす夏休みだったけど、今年はちょっとだけ違った。私はそれなりに楽しかったけど、心はちゃんと楽しかったかな？今さら不安になる。

目線の先に間仲がいる。なんか話しかけづらい。祭りで大失態を犯してから間仲が気になる。倒れた私をおんぶして家まで送ってくれたらしいけど、私は全然わかんなかったし、きっと重かったろうし、熱でうなされて、変なこと口ばしってたかもしれないし、聞いたらスッキリするんだろうけど・・・なんかはずかしい。
でも、ちょっと自然なかんじで聞いてみよう。

「おはよう間仲。」

今あるちっぽけな勇気を集めてぶつける。無理やり笑顔になろうとしてるから、変な顔してるかもしれない。

「おはよう。水原さん。」

間仲は全然ふつうだ。なんか良かったような、ガッカリしたような・・・。

担任が入ってきてしまった。席に座らなきゃ。じゃぁ。と言って間仲の横を通る。それだけなのに少しドキドキする。大丈夫。友達だから、間仲はあたり前の事をしただけだ。特別な事じゃない。きっと。

でも、まだドキドキする。

お昼ご飯

「いや、本当ついてないし大変だねぇ。あたしなら何とかして逃げるね。」

と言って、イスに足を立てて座り、ごうかいにオニギリを食べる奈緒美。

お昼休みに４人で机を囲みながらのガールズトークは、けっこう楽しいもんだ。ムードメーカーの奈緒美、ツッコミの薫、癒し系の心、私はいったい何の役割だろう。

「文化祭実行委員は、決めんのめんどくさいから、クラス委員でいいだろう？って、どんだけめんどくさいんだよ。担任は。」

薫は雑誌に載ってる、新発売の化粧品をチェックしながらお弁当を食べている。

そう、私の役割はクラス委員と、また新しく文化祭の実行委員。こういうのは嫌いじゃないけど、勉強時間は減るし、心と一緒にいる時間はけずられるし、ちょっと困る。

「きっと1学期に葵がクラス委員でしっかりやってるから、それで味しめたんじゃないかな？なんかあったら私も手伝うし、頑張ろうね。葵。」

ニコッと笑顔を向けてくれる心。

あぁ、本当可愛い。こんな事言われたら頑張るしかないでしょう？

「まぁ、なんとかなると思うんだけどさ。次の時間クラスの出し物っつーか、何やるか決めるらしいんだよね。ここで時間かかると後

がグタグタになるからさぁ・・・」

そう、頑張るって言ってもやらなきゃならん事はたくさんあるし、気持ちだけでは前に進めない。高校の文化祭って、中学とはやっぱ違うと思うし不安。

「大丈夫だよ。アンタなら。肝だめしの時とかよかったじゃん。何かあったらクラスのヤツ等だって動いてくれるだろうし。」

キッパリと言い放つ。うんうん。と奈緒美と心がうなずく。なんか説得力あるんだよなぁ。

こころ強い。頑張らなきゃ。

ありがとう

文化祭まであと3日。時間が流れるのって本当に早いって、イベントの時にはより感じる。私たちのクラスは、よくありがちなカフェに決まった。

「水原さん。この板は何色にすればいいの？」

中庭で店の看板作り。ぶっちゃけなんでもいんだけど、そんな事言えないし、私まだやらなきゃいけない事たくさんあるんだけどなぁ・・・。

「そっちは俺がやるから、教室の飾りつけやっといてくんない？」

お！気が利くじゃんと思ってふり向くと、間仲だった。

なんかドキッとしてしまう。夏休み終わって、文化祭の準備で忙しくなっちゃって、あれからちゃんとお礼言えてないし、最近コイツ女の子から人気あって告白されてるらしいし、中学の頃はそんな事なかったのに、変わったんだなぁ。

「あ・・ありがとう間仲くん。でもかわいくやってよね～～！」

目をクリクリさせて上目づかいで、さりげなく肩にタッチしてパタパタと走って行く。あの子はきっと間仲の事を好きなのかもしれない。かわいいなぁ。分かりやすくて。

作業にとりかかる間仲はテキパキとこなしている。「ありがとう」って私も言ったほうがいいかな？でもさっき、あの子に言われたし、別に私が言わなくても・・・。もんもんとしてると目が合ってしまった。

「何？」

男らしいがっちりした腕なのに、細くて長い指がずるい。
私はお祭りの日、あいつに助けてもらった。お礼を言っても特別な意味なんかない。
間仲の隣に座る。

「間仲、あのさ、祭りのときありがとう。あと、さっきも・・・。」

まわりに聞こえないように小声で言う。顔見られない。はずかしい。
ありがとうって言うの。間仲が作業する手を止めて、肩と肩がふれそうな所まで近づいてきた。

「はい。どういたしまして。」

ふふっと笑われて、どっか行ってしまった。立つときにポンポンと肩を優しくたたかれた。意外だったから、すぐに反応できなかった。
なんなんだ！？アイツのあの余裕なかんじは！？なんかムカツク。
間仲のくせに。前はもっと小動物みたいなヤツだったのに、今ちょっとモテるからってムカツク！！！
急に間仲が止まってふり返るから、すごくビックリしてしまった。
な・・なんだ？

「あんまり色んな事考えこむなよな！」

またふり返って行ってしまった。もう、目をはなす事ができない。
ふれられた肩に、まだ間仲の手の感触が残っている気分になった。

気になってしまう

高い場所の飾りつけをしてるのは間仲で、そのまわりにいるのは、あいつに気があるのがバレバレな女の子達。私は薫と奈緒美とで、テーブルクロスにする布の端にレースをつけている。心はトイレに行ってしまった。

間仲を囲んでいる子達の声がうるさくて、気が散ってイライラする。

「最近あいつ人気だよなー。間仲。文化祭の準備の期間で、告られてるのすごい見た。」

奈緒美は飽きちゃってるのか、窓の外を見始めてしまった。

私も見た。となりのクラスの子とか、けっこうカワイイ子達から告白されてるらしいけど、断り続けてるみたい。ウワサだと「好きな人がいるから」だって。それを聞いたとき、なぜかドキッとしてしまった。

「ぜいたくだよなー。告ってきた子全員フッってんだもん。あいつの好きなやつって、相当いい女なんだろうなー。ねぇ、薫もそう思わない？」

今度は薫に付きまといはじめた。

「うるさい。あんたがサボってる分、あたしと葵でやってんだからジャマしないで。そんな気になるんなら、本人に聞けば？」

2人のこんなやり取りも慣れた。ケンカしてるみたいに見えるけど、本人達はこれがちょうどいいらしい。はいはいすいません。とか言いながら作業に戻る奈緒美。またどうせ、すぐ飽きちゃうんだろう

な。

気になるんなら、本人に聞けば？

薫の言った言葉が気になって、頭の中をグルグルしている。さっきも指に針を刺しちゃったし、最近いつもの自分じゃないって思う。でもそれが、なんのセイなのかが分からない。今までだったら、こんなに男の子を気にしたりしなかった。

「葵、大丈夫？なんか・・こころ、ここにあらずって感じだけど。」

ハッと我にかえる。心と薫と奈緒美の４人で帰ってる途中だった。薫と奈緒美は前を歩いていて、文化祭の夜がナントカって話をしてる。

心のとなり。心のニオイが意識しなくても私に届くぐらい近くにいる。

「ごめん。なんか今日忙しかったから、ちょっと疲れたのかも。」

心のとなりにいたのに、私は今、間仲の事を考えてしまっていた？心の表情が一瞬さみしそうになった。

「明日だもんね。文化祭。」

そう、明日が本番なんだ。間仲の事を考えてる余裕なんかない。私は実行委員なんだし、成功させなきゃいけない。

「そうだ。２人共、文化祭の夜のことで、いいこと教えてあげる。」

薫がふり向いて手招きをしてきた。薫の笑顔がなんか怪しい。

「いいことだってさ。行こう。葵。」

手をぐいっとつかまれた。いいことか・・。心が楽しいならいいか。

薫の話をワクワクした目で聞いてる心を見たら、そう思ってしまった。

明日の文化祭も楽しくなればいいな。

文化祭で

文化祭の夜は花火をあげる。それを一緒に見たカップルは、ずっと一緒にいられるとか、いられないとか。まぁ、よくある話で、きっと恋のウワサが好きな子達が言い始めたんだと思う。みんな本当にそうなるなんてムリだと分かっているけど、こころのどこかで「もしかしたら」っていうのはあると思う。誘い合っているのを見ると、やっぱり気になってしまう。

「誘ってＯＫもらったら、それって告白して成功したって感じだよね。」

薫がそんな事を言っていた。
そうなのかな？もし私が心を誘ってＯＫもらったら、それも告白成功って事にちゃんとなるのかな。・・・いや、たぶん心と私の場合は違うな。心に断られた事なんか無いし。
ちらっと心を見る。やっぱりそこら辺の女の子とは違う。まとってる空気と言うか、放つオーラと言うか。文化祭には他校の生徒も、もちろん来ていて、ウチのクラスにもその人達がいる訳で、やっているカフェがけっこう人気な訳で、オーダーを受けるのが心に集中しちゃう訳だ。心が通ると皆ふり返る。下心みえみえな顔がイラッとさせる。

「すみませーん。こっちいいですか？」

また心か？って思ったら、私に手招きしてた。おっと私か。今は目の前の事に集中しないと。
高校生、大学生？くらいの男３人組みか。みんなチャラ男ってかんじだ。

「えっとぉ、コーラ2つとぉ、あとコレ1つと君を持って帰りたいんですけどぉ。」

周りの2人はニヤニヤして気持ち悪い。本当にこんな事言う人がいるんだと、逆に尊敬してしまう。全身の毛穴が開いているんじゃないかな。言葉も出ないぐらい気持ち悪い。

「君、キレイだね。1年生なのに大人っぽいよねぇ。休憩とかいつ？遊ばない？」

逃げたい。この場から今すぐに。

「すみません。休憩とか分からないんで。コーラ2つとメロンソーダですね。お待ちください。」

営業スマイルをして、さっさと逃げた。後ろから「クールー！！！」って声が聞こえてきた。バカだ。

やっと交代の時間。これから夜まで自由に見て回れる。心も薫も奈緒美もそうだから、4人で回るって決めてた。高校に入って初めての文化祭だから、どんな感じか気になる。2，3年生ってどんなのやってるんだろう。

「ねぇねぇ、夜の花火もさ、4人で見ない？」

イカ焼き、やきそば、唐揚げ、わたあめ、お好み焼きを順番に食べている奈緒美が言い出した。あの子の食欲と胃袋はどうなっているんだろう。次はフライドポテトを狙ってるみたいだ。

「えー。女４人で見んの寂しくない？周りはどうせカップルばっかりなんでしょ。」

すごく嫌そうな薫は、リンゴアメをまっさきに買っていた。なんだかんだで子供っぽい所もあるんだな。

心はアイスを無理やり奈緒美に買わされていたけど、表情が楽しそうだったからそのままにしておいた。楽しいならよかった。

「でもいーじゃん。思い出になるし。花火見たくないのー？あたしは見たい。見ようよー４人でさー。」

薫と奈緒美はどっちも譲れないみたいで、あみだくじで決める事になった。これなら負けても文句は言えないみたいで。なんだそりゃ。

結果・・・奈緒美の勝利。４人で見る事になった。奈緒美のはしゃぎっぷりはすごかった。通りかっかた人達がみんな見ている。さて、打ち上げるまで時間があるし何しようかな。

「じゃぁ、まだ時間あるし2人に分かれよう。あたしはナオといるから、葵は心とで。いいでしょ？時間になったら校庭でね。」

グイグイと奈緒美を引っぱって行ってしまった。薫の行動が早くて、心とポツンと残されてしまった。

どうしよう。2人になれるとは思ってなかったから、急に緊張してきた。最近忙しくて2人っきりになってなかったから、何をすればいいんだっけ？

「行こう葵。ぼーっとしてたら時間がもったいないよ。」

すたすた歩き出す心も、どことなく緊張してるのか、動きがかたい。

なんだ。心も私と同じなのか。ちょっと安心した。後ろをゆっくりついて行く。

今までと違う

2人で文化祭回るって言っても、もう4人でほぼ行っちゃったから行くところがあんまりない。前を歩く心も、何も喋らないからちょっと気まずい。最近は文化祭の準備で2人だけで話すのが少なくなってた気がする。だからかもしれないけど、心も気まずそう。前は気まずいなんて事なかったのに。2人一緒にいるだけで満足だったのに、どんどん欲張りになっていってるような・・。想いは伝えることはできないと分かっていても、一緒にいれる事以上をこころのどこかで望んでるのかも知れない。

「葵、大丈夫？つまんない？」

いつの間にか、前を歩いていたはずの心がこっちを見ていた。つまんないなんて、そんな訳ない。そんなにヒドイ顔してなのかな。

「そんな訳ないじゃん。ちょっと考え事しててさ。ごめんね。心はどこ行きたい？」

うまく伝えられない。そりゃそうかも知れないけど。

「私はなんでも楽しいよ。葵は実行委員で疲れてるでしょ？どっかで休もうか。」

中庭に出ているイスに座った。知らない学校の制服を着た子達や、大人達を2人でボーっと眺めながら、会話を探す。でも見つからない。

なんでかな。最近あんまり喋ってなかったから、話すことなんかいくらでもありそうなのに、上手く見つからない。前は考えるより先

に喋ってたのに、なんでかな。上手い会話が見つからない。
ザッと急に心が席を立つ。びっくりした。

「私、トイレ行ってくる！」

小走りで行ってしまった。
ごめんね、心。つまんなかった・・よね。なんか上手くいかない。
なんでかな。
はぁーっとため息が出てしまった。幸せが逃げていく。なんちゃって・・・。

「幸せが逃げちゃうよ。」

後ろから声がしてふり向くと・・・間仲だ。ドキッとする。なんか体中の血がドクドクいってる音が聞こえた気がしてはずかしい。少し汗をかいていて、口元が笑っている。運動でもしてたのか？さっきまで心が座ってたイスに座り始めた。心が帰ってきたらどうしよう。

「斉藤さんは？さっきまでいたでしょ？」

こいつ見てたのか？まぁ、いいけど。

「トイレ行った。すぐ帰ってくると思うけど。」

ちょっと今のキツくなかったかな？かんじ悪く言っちゃったかも。
だけど間仲は、ふぅん。と言っただけでイヤそうじゃなかった。良かった。
間仲ってよく見ると、かっこいい方だと思ってしまった。背も高いし、顔だって整ってるし、昔より服装だってマシだし。周りの女の

子が騒ぐのも分からなくもない。いっぱい告白されてるの断ってるらしいけど、本当はもう誰かと付き合ってたりとかしてるのかな？胸がザワザワする。なんだろう。この感じ・・・。

「あのさ、水原さん。」

急に話しかけられて、ビックリした。

「もし良かったらなんだけどさ・・」

なんだろう。なに言われるんだろう。

「夜の花火、一緒に見ない？」

そう言い終わったと同時に、間仲の後ろに心が立っていたのに気づいた。

自分勝手

間仲に誘われてしまった。夜の花火に。
これって、つまり私と見たいって事だよね？2人で・・・だよね！？たぶん。なんで私となんだろう。だって間仲は好きな人いるんだよね。
・・・私！？まさか。だって中学の時フッてるし、友達になったばっかりだし。なんで私を誘ったんだ？
間仲は自分の指先あたりを見て、落ちつかない様子だ。答えを待っているような、この場から逃げたそうな変な顔をしている。
なんか全然イヤじゃない。なんでだろう。間仲となら見てもいいかもって思ってる。

「ダメだよ間仲くん。葵は私たちと見るんだから。」

心が私と間仲の間にフワリと入ってきて、間仲が見えなくなった。
そうだよ。私なんかＯＫしちゃいそうな気になったけど、心たちと見るって事になってたし、間仲と見てるヒマなんかないんだよ。なのに私、ＯＫしようとしてた。私には心がいるのに。
罪悪感みたいな、はずかしいみたいな気持ちが湧き上がってきて、逃げたくなった。

「そっか。じゃぁ分かった。」

間仲が席を立つ音がする。声、ふるえてた？足音が周りのザワつきの中に消えていった。声がふるえてたよね？席立ったとき、何思ってたんだろう。がっかり？残念って思ってたのかな？胸がチクチクしてザワザワする。
私もがっかりしてる？断ってがっかりしてる？心と一緒に見れるの

に、すごくうれしいはずなのに、気持ちが落ちつかない。ザワザワして、いつもの自分じゃないみたい。どこか静かな所へ行きたい。心がまだ前に立っていた。背を向けて、テーブルに寄りかかっている。華奢な背中が、吹いている風が寒いのか少しふるえている。手をのばして心の髪にさわる。やわらかくて気持ちい。落ちつく。と同時に自分にイライラする。私は心が好きなのに、間仲を気にしている。それがすごいムカつく。
なんで間仲を気にしているんだろう。フッて申し訳ないと思ってるから？少し優しくしてもらったから？花火に誘われたから？
風が強く吹いて心の髪が乱れた。横顔がチラッと見える。唇を少しかんでいて、目線を下に落としている。

心！・・ごめん。私すごい自分勝手だ。さっきだって、心といる時つまんないような態度とっちゃったし、今だって間仲のこと考えてたし、心のこと泣かせちゃいそうだし。

「心・・ごめん、私・・・。」

立ち上がって手をつかむ。顔を見ると、きょとんとしていた。
泣いてなかった。前みたいに泣かせてしまったらどうしようかと思った。よかった。

「びっくりした。どうしたの葵？ごめんって？」

心が困った顔して笑う。細い手が冷えて震えている。
ごめんね、心。私は勝手だよ。心のこと好きって思っていても間仲のことを考えたり、自分のせいで困った顔させてるのに、笑っていてほしいって思ってる。胸がチリチリして痛い。ギュッと手に力が入る。
自分勝手だ。

「葵どうしちゃったの？そろそろ花火始まっちゃうよ。行こう。」

ニコッと笑って、今度は心が私の手を包む。ひんやりしてるけど、やわらかくて優しかった。

つないだ手

校庭まで手をつないで行くと、薫と奈緒美がもう待っていた。奈緒美は、変な顔して笑ってるウサギのお面をつけていて、手には同じものが2個ある。私達に気づいて走ってきた。もしかして・・・。

「遅いよ2人共。はいコレ。おもしろい顔してるから、あんた達にも買っちゃったよー。」

やっぱり・・。

ゲラゲラ笑いながら心にお面をつけていく。普段の心なら嫌がって、なんやかんや文句を言いながら最後にはつけるってかんじだけど、今日はやけに素直につけている。

薫が後をゆっくり歩いてきた。腕を組んでヤレヤレってかんじで奈緒美を見ている。でも、手には同じのを持っている。たぶん奈緒美が4人おそろいとか言いだしたんだろうな。薫とお店の前で言い合ってる姿が目にうかぶ。

「まったくすごいセンスだよね。他にも色々あんのにさ、なんでそれ？って思わない？」

薫の視線が、されるがままの心から、私たちのつながっている手に一瞬動いた気がした。

「奈緒美、ほら場所とりするんでしょ？行くよ。」

腕をつかんで、ずんずん歩いて行ってしまった。奈緒美はお面をつけてるから、よく周りが見えてなかったんだろうな。向こうで「えー」とか「急にどうしたのさー」とか聞こえる。ごめん薫・・。気

を使わせちゃったな。
遠くなっていく2人の姿を、そのままぼーっと見ていた。心はお面をはずさない。背が低いから子供みたいに見えて、ちょっとカワイイ。
花火を見に来た生徒たちが多くなってきた。お面はずかしくないのかな？

「心、お面はずさなくていいの？みんな見てるけど。」

首を横にふって、どこかを見ている。そんなに気にいったのかな。この変な顔のヤツ。ならいいんだけど。
風がやさしく吹いて、少し熱くなった体をさましてくれる。心は鼻をズズッとすっている。寒かったかな？まだ手が少し冷たいし、外より教室とかで見たほうがよかったかな。

「寒かった？私たちは中で見ようか。薫たちに言ってくるよ。」

おしいけど、つないだ手をはなそうとしたら、心がギュッとにぎってきた。

「いいの。このままで大丈夫だから。もう花火あがっちゃうし。」

たしかに、もうすぐ時間だ。今からよく見えそうな教室を探すってなったら、間に合わない。このまま見るか。

「なら、薫と奈緒美がよく見える場所とってるらしいから、そこ行こうか？たぶんあっちだから・・。」

1歩を踏み出したけど、心が動こうとしない。危うく前に転びそうになった。

どうしたんだろう。ふり返って見ても、お面してるから表情が分からない。手をさっきより強くにぎってきた。

「どうしたの？」

顔を心に近づける。鼻をすする音がした。

「葵、本当は間仲くんと見たかった？」

お面越しだから、ボヤッとした声だった。

胸がザワッとした。心、もしかしてずっと気にしてたの？ずっと・・・。

たしかに間仲に誘われたとき、一瞬だけ行ってもいいかなって思っちゃったけど、でも私は心が好きだし、あいつとは友達ってだけだし・・・。

他の男の子よりはしゃべるけど、少しやさしくしてもらったけど、心より間仲と一緒にいたいなんて、そんな事ない。

「私は心と一緒にいたい！！」

ドォォォン！！

始まった。心も私も空を見上げる。次々にあがっていくのを見て、手に力がはいる。

『花火を一緒に見たカップルは、ずっと一緒にいられる・・・。』

ドォォォン！！

心、好きだよ。すごく。

ドォォォォン！！

いっそ、伝わってしまえばいいのに。つないだ手から私の思ってること全部、心に伝わっちゃえばいいのに。

ドォォォォン！！

心がお面をはずして、私を見た。花火の明かりで顔が一瞬照らされる。

笑っている。私の大好きな心の笑顔だった。

「私も葵と一緒にいたい。」

全部伝わったわけではないけど、でも伝えたかった事は、そういう事なのかもしれない。

私もつられて笑っちゃいそうになった。心の笑顔は、私を幸せな気持ちにしてくれる。

「行こう。奈緒美たち待ってるよ。」

フフフッと心がやさしく笑いながら、ゆっくりと歩きだした。

つないだ手は暖かくて、もうふるえていなかった。

帰り道

無事に文化祭が終わった。後片付けが終われば、また普通の日常にもどる。花火の場所とりをしてくれた奈緒美は、私たちが後から来たことに少しスネてたけど、帰り道で肉まんをおごったら機嫌がよくなった。

「だって、せっかく1番いい所で皆で見たかったのにさぁ。最初からと途中じゃ全然ちがうんだもん。・・まぁでも、この味なら許してもいいさ。葵と心は肉まんに感謝するんだね！」

ポーズを決めてるけど、手に肉まんを持ってるから、全然きまってない。薫はシカトして行っちゃったし、心は困ってる。
でも、奈緒美のこういう所にけっこう和んでるし、友達思いなヤツだって薫も心もちゃんと分かってると思う。薫だって何も言わないけど、いつも1番心配してくれる。心も2人が大好きで、私も皆が好き。
だから私たちは一緒にいられる。

「また来年も4人で見たいよね。」

空を見上げながら心が言った。
今日は星がキレイだ。奈緒美はニヤリと笑ってうれしそうだ。
来年も一緒に・・か。うん、そうだね。そうしたい。来年も一緒にそうしたいって、思える相手がいるってすごい幸せな事だと思う。
心は、まぁ特別だけど、薫と奈緒美の存在ってすごい大きいと思う。
薫は、私が心のことどう思ってるか気づいてる。海であんなことあっても、何も変わらず接してくれる。それがどんなにホッとできるのか、本人は分かっているんだろうか。

奈緒美は鈍感だけど、うすうす普通ではないって事ぐらい感じてると思う。でも何も言わない。気づいてないフリをしてるのかもしれない。奈緒美なりの優しさで、薫とは違ったやり方で、見守ってくれている。
私は2人に何かできているのかな。2人だけじゃない。心にだって・・・。好きって気持ちだけじゃ不安になる。

「ちょっとー、何暗い顔してんのさー。」

奈緒美が背中をバンバン叩いてきた。痛い・・・。

「文化祭終わってつまんない気持ちは分かるけど、そんな顔してちゃダメっしょ。そんなん見たら、あんたを頼ってるあたしたちだって変な顔になっちゃうよー？」

ゲラゲラ笑って行ってしまった。
頼ってる。
私のこと頼ってるって言ったよね？しかも「あたしたち」って言った。私、頼られるほどの事なんて何もしてないと思う。でも、うれしい。一緒にいても大丈夫って言われたみたいで、うれしい。
空を見上げると、さっきよりも星がキレイに思えた。

「葵、何してるの？早くおいでよ。」

3歩ぐらい前にいる心がニコッと笑う。
不意をくらった気分。ずるいよなぁ。
空気を大きく吸って吐く。息がかすかに白く見えた。もう、そんな時季かぁ。
心のとなりに立って笑い返す。来年も、その次の年もこうやっていられますように。

流れ星はなかったけど、今日はすごく星がキレイだから、叶えてくれそうな気分になった。

図書室で

せっかくキレイに飾りつけした教室も、苦手だけど頑張って縫いつけた布とレースも、かわいく色ぬってくれた看板も、祭りが終われば片付けなきゃいけない。
自分達が作った物を自分達で壊したりするのって、なんとなくこころ苦しい。せっかく皆でやったのにって思う。
薫とゴミ捨てしながら、文化祭の話しで盛りあがる。奈緒美と2人でまわってる時に色々食べさせられて大変だったみたい。だけど楽しそうにしゃべってるから、結果良かったって事なんだろうな。
焼却炉でゴミをつめこんでいると、

「あー！やっといた実行委員！！生徒会が今日中に報告書だせって言ってたぞ。」

担任が何枚か紙を渡してきた。
なになに・・いくら使ったか、何買ったか・・・。これ今日中って・・まぁレシートとか保管してあるからできるけど、今からやると完全に放課後じゃん。担任のヤツめ。

「大変だねー。実行委員様は。教室はあたし等でなんとかなるから、あんたソレやっちゃいなよ。」

すたすた行ってしまった。
教室は片付け中だし、図書室にでも行くか・・・。

ガラリとドアを開けると、本のニオイに包まれる。静かだ。図書の先生も誰もいないから、エアコンとペンの音がいつもより大きく聞こえる。しばらく書いているとガラリと誰かが入ってきた。ちらっ

と見ると間仲だった。
うわっ・・。
たぶん私の表情ヤバイと思う。だって気まずいんだもん。花火に誘われたのに断ってるし、何か変なこと言われたらイヤじゃん。それに私から言ったんじゃなくて、心が言ったからよけい気まずい。あやまる？でも心たちと見るって決まってたし、あいつは「よかったら」って言ってたし、別にあやまるような事でもないか？
もんもんとしてる間にも足音はどんどん近づいてくる。おねがい。私に気づかないで！

「やーっと見つけた。」

願い届かず。
ポケットから何枚かレシートを出して机に置く。もしかして、これって文化祭で買った物の？

「渡すの忘れててさ。報告書だすの今日中って聞いたから。これ必要でしょ？」

そうだったんだ。わざわざ届けに来てくれたんだ。なんだ。そういう事か・・「やっと見つけた」って、そんなに探してたんだ。
見ると少し汗ばんでるようで、シャツのボタンが多めにはずしてある。走りまわってたのかな。

「ありがとう。助かる。」

笑顔をかえす。ぎこちないかも。
用事は済んだはずなのに、間仲はイスに座り始めた。書いている用紙をずっと見ている。なんだろう？手に力が入って震えちゃう。やっぱり花火の事ちょっと怒ってんのかな。

「ごめん。」

小さな声でしか言えなかった。でも、私達しかいない部屋だと大きく聞こえたかもしれない。はずかしい。

「なんであやまるのさ。」

私を見てきた。少し笑ってるけど、ちょっとだけ寂しそうに思えた。怒ってないけど、やっぱり気にしてるって事かな。

「花火誘ってもらったのに、行けなくて。」

目をそらす。なんか見てられなかった。罪悪感というか、胸が痛くなってきそうだったから。

「別にあやまる事ないのに。だって斉藤さんたちと行くって決まってたんでしょ？」

ひじをついて、私の手元を見てきた。力がはいって体が熱くなる。最近、間仲に見られたり触れられたりするとこうなる。

「でもごめん。私がもし誘って断られたら、やっぱりちょっとイヤだと思うから。」

だから間仲もイヤだったんじゃないかな？胸がズキズキしてきた。

「許さない。」

・・・・え？

間仲を見る。

「なんつって。そう言ったらどうする？って話。まぁ俺は優しいから言わないけど。」

ニヤッと笑って立ち上がる。ドアに向かって歩き始めた。
なんでそう思ったのか分からないけど、間仲は無理して笑ったんじゃないかなって思った。大丈夫なフリしてるだけで、全然大丈夫じゃないのかもしれない。それで、私は間仲のそういうところに甘えてるんだと思う。
手にギュッと力がはいる。

「間仲！！」

自分でもよくこんな大きな声でたなって思う。立ち上がって呼びとめる。間仲も目を大きくして、こっちを見てきた。

「やっぱりごめん。本当にごめん。許さないっていうの本当にそうだと思う。優しくしてくれるから甘えてるんだと思う。だから・・その・・言ってほしい。思ってること我慢しないで言ってほしい。・・・友達だし。」

少し後悔した。何はずかしい事を言っちゃってんだろう。本当に間仲が我慢してるんだったらいいとして、違かったらただのはずかしい勘違いじゃん。・・どうしよう。バカだ私。

「・・・うん。」

間仲は出て行った。
さっきまでのやり取りがなかったみたいに、部屋は静かになった。

「うん」って、やっぱり我慢してたって事？本当はイヤだったって事？許さないって事？考えるほど分からなくなってきた。ため息がでる。

机の上の用紙に目をやる。今日中に終わればいいなぁ・・・。

おわび

生徒会室を出る前にもう一度頭を下げる。

「失礼しました。」

そっとドアを閉めて教室へ向かう。すっかり遅くなって、外はもう暗くなり始めている。早く帰っておフロ入って寝よう。

図書室での事を思い出すと、すごくはずかしくなる。

「思ってる事我慢しないで言ってほしい」か・・。本当に何を言ってるんだろう。友達っていってもあんなはずかしいこと言わないよ。変なヤツって思われただろうな。明日だって顔合わせるのに、何で自分から気まずい状況を作っちゃうんだろう。

ため息をつきながら教室の前まで来ると、まだ電気が点いていた。

誰かまだ残ってたんだ・・・。

開けると、間仲が窓際に座って外を見ていた。

なんでいるんだよ・・。

とりあえず自分のカバンを取りに入ると、気配に気づいたのかこっちを見てきた。ぼーっとした目だった。

「・・終わったんだ。」

カバンを抱えて立ち上がった。

「うん。」

あくびをしながらこっちに来た。寝てたのかな？

早く出ようと思って慌てながらペンケースを閉まってたら、消しゴムが落ちた。コロコロ転がって、間仲の足元で止まる。

「はい。」

拾ってくれた。ただそれだけなのに、ドキッとしてしまう。

「ありがとう。・・じゃあまた明日！」

カバンにつっこんでドアを見る。

「あのさ！」

私達しかいない教室で、間仲の声がいつもより大きく聞こえる。
何だろう。あいつの顔を見るのちょっと怖い。でも向かないの失礼だよね。おそるおそる見る。

「あの、正直なこと言うと、やっぱりちょっとショックだった。」

花火のこと言ってるんだろうか。頭の中で言われた言葉がグルグルと回っている。

「断ったことを謝られるのはかっこ悪いからやめてほしい。」

たしかに言われてみればそう思う。
はぁ。とため息をついて、こっちを見てくる。

「という訳で俺は傷ついてます。さぁどうする？」

えっ・・？どうするって言われても・・どうしよう？私が悪いのかもしれないけれど、きゅうにそんな事を言われても何をすればいいんだろう？あやまる？いや、今やめてほしいって言われたし、どう

しよう・・・。
変な汗がダラダラ出てきた。頭の中がグルグルして、目が回ってきたような気分になった。

「何かおわびします・・。」

それしか思いつかなかった。
おわびと言っても何をやればいいのか全然わからないけれど、色々迷惑かけてるから、もしかしたら借りが返せるかもしれない。

「わかった。じゃぁデートして。」

そっか。おわびのデートね。うんうん分かりました。・・・・・ってなんだって!?今なんて言った!?聞き間違い?

「あの、今なんて言った?」

おそるおそる聞きかえす。間違いであってほしい。

「あ、デート?おわびしてくれるならデートがいいかなーって。」

いいかなーって・・・なにそれ!?私が言ったことって、そういうのもアリなの?たしかに「何かおわびします」とは言ったけど、そういうつもりではなかったんだけど・・。

「それじゃぁ今日はもう遅いから、帰りながらどうするか決めようか?」

スタスタとドアに向かって歩き出す間仲。
帰りながら決めるって、まさか一緒に帰るって事?ウソでしょ!?

「なにしてるの？早くしなよ。」

電気を消しながら急かしてくる。

ちょっと待ってよ・・・。

話しについていけない。どうしよう。とりあえず本当に外が暗くなってきたから、この際帰りは一緒でもいいとして・・・。

「早くしないと校門閉まっちゃうよ？」

間仲の声が廊下に響く。

だから、ちょっと待ってよ・・・。

バタバタと後を追いかける。

胸の奥がザワザワしてきた。

間仲との帰り道

ケータイを見ると心からメールがきていて、『今日は先に帰るね。待ってあげられなくてゴメンネ。』ときていた。いつ終わるのか分からなかったんだな。『ゴメンネ』なんて悪いことしちゃったな。

前を歩いている間仲をちらっと見る。
どうしてこんな事になっちゃったんだろう。一緒に帰るなんて・・。こいつ、私におわびの約束させる為に、わざわざ教室にいたのかな。確かに図書室で、思ってること言ってほしいって言ったけど、デート・・・だなんて。そういう事もアリなの？
私は我慢してる事とか、うれしい悲しいとかを言ってほしかったんだけど。でも、今さら無理とか言えないし・・・困った。誰か知ってる人に会ったら、この状況をなんて説明すればいいんだろう。

間仲の後ろをノロノロ歩く。足が重たい。っていうか何か話してくれないと気まずいんだけど、さっきから一言もしゃべらない。どうしちゃったんだろう。
ちらっと見る。男の子の背中って、なんでこんな広いんだろう。いつも心とか見てるから、よけいに大きく感じてしまう。男の子・・なんだなぁ。

「それでさ、日曜はヒマ？」

クルリといきなり向いてきたから、こころの準備ができていなくてビックリした。一歩後ずさる。

「えっと・・大丈夫だと思う。」

目をそらす。今思ってた事、顔に出てないよね？なんか間仲といるとおかしくなる。冷静じゃなくなるような、ソワソワしてくるような。

「そっか。中学校までの道は覚えてる？」

なんで中学？まぁ卒業してからそんなに経ってないから、そのぐらい覚えてる。3年通ったんだし。

「覚えてるよ。」

中学かぁ。卒業して1年すら経ってないのに、なんか懐かしく感じちゃう。

心の事を意識し始めたり、間仲と初めて会ったのも中学だった。心はどんどんかわいくなっていくし、間仲も男っぽく変わった。私は？何か変わったんだろうか？

そんな事を考えている間に家に着いてしまった。心の家を見ると、部屋の明かりが点いていた。門を開けて、間仲を見る。顔が赤い。寒いのかな？

「日曜の午後2時に中学の校門まで来て。」

クルッと向きなおって行ってしまった。私まだ行くって言ってないんだけど・・・。そういえば間仲の家ってここら辺だっけ？

ドアを開けると、蒼佳が仁王立ちで立っていた。びっくりした・・・。

「お姉ちゃん遅い。」

台所からいいニオイがする。今日はたぶんアレだな。おでん。リビ

ングに行って、蒼佳の言う事に適当に返事をしてテレビをつける。

「お姉ちゃん誰といたの？」

一瞬、体の動きが止まった。見てたのか？

聞こえていないフリをして、テレビを見続ける。

「あんまり遅くならないようにしてよね。暗くなるの早いんだし。まぁ誰かに送ってもらえたなら、いいんだけどさ。」

まだ何かブツブツ言いながらご飯をよそっている。

・・・間仲は送ってくれたのか？暗くなってたから？・・・いや考えすぎだよね。そんな事ないよね。家が近かったからで、たまたま帰り道が一緒だったんだよね？きっと。

「ねぇ、日曜って用事ある？」

体がビクッと反応してしまう。

日曜・・・日曜の午後2時に、中学校の校門に来て。

顔がカッと熱くなってきた。蒼佳に背を向ける。

「その日はちょっと、用事というか何というか・・・。」

ゴニョゴニョと濁す。どう言えばいいんだろう？言葉が出てこない。

「はいはい。どうせ心ちゃんと、どっか行くんでしょ？」

小さくため息をして、鍋をテーブルに置いた。

・・・違う。心とじゃない。胸の奥が重たくなった。複雑な気持ちになる。なんで私、断らなかったんだろう？

マフラー

「ねぇ葵、きのうは一人で帰ったの？」

横を歩いている心の、白くなった息が私の肩にあたる。ドキッとする。

「うん。まぁそうだね・・・。」

間仲と一緒だったなんて言えない。あいつは友達だけど、なにを喋ったとか、なにをしたとか、なんとなく知られたくない。変な勘違いされてもイヤだし。高校生の男女が一緒にいると、恋愛のウワサになるけど私はそんな気持ちないし、好きなのは心だし。心に私と間仲はそういう関係だって思われたら絶対イヤだもん。

「待ってあげられなくてゴメンネ。でも次はちゃんと待ってるから。」

ウソをついてしまった。心の言葉にもグサッとくる。今まで心には隠し事とかウソとか言ったことなんてなかった。でも間仲の事はなんだか知られたくない。勘違いされたらイヤだっていうのもそうだけど、他にも理由があるような。でも、それが何なのかよく分からない。

朝の冷たい風にブルッと心が身震いをした。

寒がりのくせに手袋もマフラーもしてこないなんて、無防備というかなんというか・・。自分のいていたマフラーを心にかける。首元がヒヤッと風にさらされる。

「大丈夫だよ。最近は寒いし、暗くなるのも早いから。委員の仕事

は、これからは遅くなる前に終わらせるよ。」

キュッとマフラーを結ぶ。赤くなった頬と鼻の頭がカワイイ。

教室に向かう途中のろう下で、後ろから知らない男の子に話かけられた。

「あの、すみません。」

誰だろう。この人。私？それとも心？

「あの斉藤さん。今大丈夫ですか？」

心に用か。この空気だと私はいないほうがいいかな。心に「向こうに行ってるね。」と小声で耳うちして、そそくさと歩く。角を曲がって壁によりかかった。これならすぐに心と男の子のやりとりが聞こえる距離だと思う。心が呼ばれる時、私は毎回こうして近くでやり取りを聞いている。そのたびに胸の奥が締めつけられる気分になる。

もしかしたら心は告白をＯＫして付き合っちゃうんじゃないか。誰かの彼女になっちゃうかもって思わずにはいられない。

同時に告白できる男の子達がうらやましくなる。声に出して言えるなんてうらやましい。

私にはできない。だって困らせるの分かってるし、その後どうすればいい？ギクシャクするに決まってる。

私が１番心のこと好きだって自信ある。今まで心に告白してきた男の子達よりも、誰よりも心のことが好きだって思う。ずっとそばにいて見てきた。どんなヤツよりも私が心のこと想ってるのに、なのに、なんでこんなにツライんだろう。覚悟してたのに、報われないって分かっていたのに・・・心を好きになってしまった。

本当に誰かの彼女になっちゃったら、私はどうしたらいいんだろう？ちゃんと「おめでとう」とか「よかったね」とか言えるんだろうか。・・自信ない。

「ごめんなさい。今は誰かと付き合うとか考えられないんです。」

小さくため息が出た。良かった。失礼だと思うけど、本当にＯＫしなくて良かった。

付き合うとか考えられないっていうのはアレなのかな？やっぱり中学の時の「アレ」が原因なのかな。確かに怖いよね。私もこうして毎回盗み聞きしてるのは、二度とあんな事になってほしくないからかもしれない。

「葵、待たせてゴメンネ。」

心が小走りで来た。

・・・違う。

キラキラした優しい笑顔。サラサラの長い髪。放つ言葉。全部が私だけのものであってほしい。私の知らない間に、誰かのものになってるだなんて考えたくない。

二度とあんな状態になってほしくないのは確かだけど、それだけが理由ではないんだ。心のことは全て知っていたくて、私の心でいてほしくて、そうじゃないのが怖いんだ。

なんて面倒くさいヤツなんだろう。私は・・・。

「私ね、彼氏なんて必要ないって思ってる。」

真面目な顔して急に言い出すから、ビックリした。どうしたんだろう。

階段をフワリと上って、最後の段で私を見下ろした。

「葵がいてくれれば、それでいいの。」

マフラーを巻いていたから見づらかったけど、はにかんでいるように感じた。

「あ！親友がいてくれれば満足って事だからね！変な意味じゃないから。」

マフラーで顔を隠して走って行ってしまった。

私がいてくれれば、それでいい。か・・。

私もそうだよ。心。私も心がいてくれればいいよ。でも、私が言うのと心が言うのじゃ意味が違うから。私が言うのはどうしても特別な意味を含んでしまうから、言えない。簡単には言えないよ。

「おはよう。何してんの？」

薫が階段を上がって来ていた。

「おはよう。別に・・。」

まだ朝なのに、すごく疲れた気がする。並んで歩いていると、前から知らない男の子が近づいてきた。

「水原さん、ちょっといい？」

なんだろう？薫に「先に行ってるから。」と耳うちされた。

理科準備室

「水原さんが好きです。」

やっぱり。そうくるんじゃないかと思った。あんまり人が来ない理科準備室とかに連れてこられたから、まさかと思ったら・・。やっぱりベタにこういう事になるんだ。

でも誰？

「あ・・文化祭の実行委員で、となりのクラスだったんですけど。」

そうだったんだ。気にしてなかったからなぁ。となりのクラスなんて。

「実行委員で一緒になって、なんかいいなぁって思って・・。俺のこと知ってました？」

緊張してるみたいで、声が震えてる。目を合わせようとしてこない。なんだか私までドキドキしてきた。

「ごめんなさい。ちょっと分からないです。」

見るからにガッカリってかんじで、ため息をついた。重たい空気が流れる。

「じゃあ、ためしに付き合ってみるとかはナシ？」

胸がギュッてなる。そうしたとしても、私は絶対に好きになんてなれない。

「今は彼氏とか、付き合うとか考えられないから。だから、ごめんなさい。」

考えられない。私が心じゃない人を好きになる？無理だよ。

「そっか・・・。ならしょうがないか。」

私の横を、少し足早に通り過ぎて行った。ガラガラとドアの音がして、遠くなっていく足音。

心が私を好きになる事ってあるのかな？万が一、億が一なったとしても、それっていつ？・・・・ダメだ。こんな事考えるなんて。覚悟してたじゃないか・・。

ドアがガラガラと開く音がした。まさか、さっきの人が戻って来たとかないよね！？

ふり返ると、間仲が立っていた。

「な・・なに！？」

顔が急に熱くなる。まさか・・さっきまでの聞いてたとかないよね？なんでここにいるの？

「だって日直だし、一時間目理科でなんか持ってくのがあるからって、日直来いって言われたし。」

しれっと、いつも通りの様子で私を見てきた。・・そうだったんだ。

「じゃぁ教室で！！」

ツカツカと間仲の横を通る。ドキドキする。

昨日あいつに・・・デート・・に誘われたけど、何を考えてるんだろう？こんなに私が気にしてるのに、間仲がいつも通りってなんだ！？

急に腕をグッとつかまれた。痛い！！
見ると間仲が少し怒った顔で、じっと見てきた。なに？私なんか怒らせる事した？

「さっき、あいつに・・。」

つづきを聞こうとしたとき、勢いよくドアが開いた。

「日直来てるかー？」

先生が来た。間仲は、とっさにつかんでいた腕を放して、少しはなれた。
びっくりした。すごい心臓がバクバクしてる。間仲は・・間仲は何を言おうとしたんだろう。『さっき、あいつに』・・なんだろう？あいつって、さっきのとなりのクラスの人？

「今日は日直2人なの？まぁなんでもいいけど。はい、これ持って。」

私も荷物を持たされた。だまって部屋を出る。
まだ心臓がバクバク音がしてる。
なんなんだよこれ・・・。なんで間仲といるとき、私はおかしくなっちゃうんだ・・。

となりを歩いている間仲に、バクバクしてるのが聞こえたらどうしようか・・。そればかり気になっていた。

隠し事

もし心が私と間仲が2人でいる所を見たら、なんて思うんだろう？友達、クラスメイト、クラス委員と副委員？
私だったら？心が男の子と一緒にいるのを見たら、きっと耐えられないだろうな。加えて2人共楽しそうに笑いあってるとかなってたら、嫉妬に狂ってなにをするか分からないだろう。

心は私の事やっぱり友達としか思ってないんだろうな。私が今みたいに男の子と歩いていても何も思わないだろうし、デートしても「よかったね！」とか言われちゃうんだろうな。なんか寂しくなる。

となりを歩いてる間仲をちらっと見る。なにを考えているのか分からない。デートに誘ってきたくせに、なにも感じてないのだろうか。・・もしかして・・そんなの冗談で、私の事をからかっていたのか！？それならこんなに悩んでるのって、なんかバカみたい。急に悲しくなってきた。
私だけいろいろ意識してバカみたい・・・。
下を向いて歩いていたら、手の中が軽くなった。

「悪い。ずっと持たせてて。後は自分でやるから。」

間仲が全部持ってくれた。最初からそうしてくれれば良かったのに、なんで持たせたんだよ。
スタスタと前を歩いて行ってしまった。
本当に何も思ってないんだなぁ。背中にむかって、舌を出してやった。

「あっそうだ。」

くるりとこっちを向いてきた。慌てて舌をひっこめる。バレたかな？

「な、なに？」

やっぱり重いから持ってとか言ってきたら、イヤだって言おう。

「きのう言ったアレなんだけどさ、本当に大丈夫なの？返事、ちゃんと聞いてなかったからさ。」

『アレ』って、きっとあの事だよね。「デート」の事だよね。冗談ではなかったんだ。そっか。

体がフワッと軽くなった気がした。

・・・・いやいや。なにホッとしてるんだ。私には心がいるんだし、行く気なんて・・無かったし。

「ごめん。行けない。」

私、悪くないよね？でも何だかモヤモヤする。気分が悪い。

「ほら、やっぱりおわびがデートだなんて、なんていうか・・その・・アレじゃん？変っていうか。それ以外でならやるからさ。」

間仲が『なにソレ？』って顔で私を見ている。自分でもなにを言っているのか分からない。

「おわびで・・か。そっか。分かった。困らせて悪かったね。」

やさしく笑って、ため息をついた。

モヤモヤが大きくなってきて苦しい。なんで笑ってるの。やっぱり

からかってたの？胸をギュッとつかまれたみたいに苦しい。
間仲がなにを考えているのか分からない。私って、間仲にとってなんなの？
バカだ。なんでこんなに泣きたくなってるんだろう・・・。

「水原さん、俺さ・・」

気づいたら、すごく近くに来て私の顔をのぞきこんできた。グッと泣きそうになるのを我慢して、間仲からはなれる。
私、きっと今すごく変な顔してる。
なんでこんな気持ちぐしゃぐしゃになってるんだろう。最近の私は変だって思う。みんなはなにも変わらないのに、私だけおかしい。
なんで間仲といると、こんなに混乱してしまうんだろう。

「葵。こんな所にいたんだ。」

心がパタパタかけよって来た。教室に行ってたんじゃないのか？

「待ってたのに全然来ないから探しちゃったよ。早く行こう。薫も奈緒美も来てるし。」

腕をグイグイ引っぱられて急かされた。

「じゃあね。間仲くん。」

間仲の横を通りすぎる。

しばらく歩いたところで、急に心が止まった。

「どうしたの？」

顔をのぞきこむと、眉間にシワをよせて険しい表情になっていた。
ギョッとして少しはなれる。
「間仲くんとなにを話してたの？」
顔をあげて、キッと強い目で見てきた。
「なにって・・。なんでもないよ。大した事じゃない。」
ハハッと笑ってはぐらかす。デートを断ってたなんて言えない。言いたくない。
心の頭をポンポンと軽くたたく。
「薫と奈緒美もう来てるんでしょ？行こう。」
心の顔を見ないで歩き出す。
ごめん・・。ごめんね。言えるわけないよ。心にまた隠し事をしてしまった。

そばにいたい

昼休みに窓から外をながめていると、男の子４人組と目が合って、手を振ってきた。顔も名前も知らないと思うけど、手を振ってきたって事は私が忘れてるだけなのかな・・。一応振り返す。

「知り合いなの？」

前に座ってる薫が聞いてきた。

「いや。たぶん知らない・・と思う。」

視線を教室へ戻す。いつもと変わらない昼休みの風景。と言いたいところだけれど、いつも私のとなりに座っている心がいない。用事があるって言って、授業が終わったらどこか行ってしまった。一緒に行こうか？って聞いたけど、『一人でやらなきゃいけないから。』って断られてしまった。それってなんだろう。昼休みはあとちょっとしかないのに、どこ行っちゃったんだろう・・。空いてるとなりがすごく寂しそうにしてる。

「モテる人は大変だねー。知らないヤツからも手振られちゃって。」

奈緒美が４コ目のパンに手をのばした。成長期って怖いと思う。ガラッっと教室のドアが開く音がして見る。知らない子だった。これで５回目。

「そういえば心はどこに行ったの？また告白されに行ったの？」

告白されに・・・そうなのかな？

急に変な汗が出てきて、下腹が締め付けられるみたいに痛くなってきた。脳裏に中学のときの忘れられないアノ記憶がよぎった。

「ちょっと行ってくる！」

後ろから奈緒美が何か言ってるのが聞こえたけど、ふり向かなかった。

思い当たる所を走って探す。どこだろう。心・・。やっぱり一人で行かせるんじゃなかった。あのときみたいな事にならないように、ずっと近くにいたのに。なんで一人にさせたんだろう。なんで告白かもって思わなかったんだろう。私のバカ！

もし、またあんな事になったらどうしよう・・。心に断られても、こっそり後をつけとくんだった。本当にバカだ私。心になにかあったら私のせいだ。守るって、ずっとそばにいるって決めたのに。

トイレ、食堂、体育館。行くかもしれない所を走って探す。

美術室の前に来た。走りすぎて苦しい。ドアに手をかける。指先がふるえて力がはいらない。お願い誰もいないで・・。

ガラッと勢いよく開けると、美術部っぽい人達が作業をしていた。みんな私を見て、「何？」って顔をしている。

「あ・・・すいません。間違えました。」

そろりとドアを閉める。はずかしくて顔から火が出そう。間違えたってなんだよ・・。もっとマシなこと言えなかったのかな・・。そんな事より、心どこに行っちゃったんだろう。

ため息をついて窓の外を見ると、体育倉庫の影に心が立っているのが見えた。窓にしがみついて目を凝らすと、奥にもう一人いるのが見えた。

ぐわんぐわん目が回ってきた。ドキドキしてその光景を見てるのが

やっとだ。・・・だって、心はもしかしたらもう私にはついて来てほしくないのかも。だから『一人でやらなきゃ』なんて言いだしたんじゃないの？
本当はずっと前から男の子と付き合いたかったけど、私がいたから断ってたのかもしれない。だったら、私はもう行かないほうがいいんじゃないの・・・？

「なにしてんの？」

薫だった。私の視線のさきの心に気づいた。

「行かないの？」

胸がギュッてなる。行きたいけど、行っちゃダメなような気がする。薫は窓に背を向けて、壁によりかかった。トンッと肩があたる。顔を見ると泣きそうな顔で笑った。

「なんでアンタたちってそんななの・・。思ってることはたくさんあるのに、何も言わないの！？相手を想ってるから？それ違くない！？」

キッとにらんできた。近いからよけい怖い。

「心配なんでしょ？そばにいたいんでしょ？」

頭の中で、薫の言葉がグルグル回る。
そばにいたい。誰よりも心の近くにいたい。でも・・・。
肩をポンと押されて、一歩前に出た。

「そう思ってるのはアンタだけじゃないと思うんだよ。」

指のふるえはおさまっていた。

「行ってきなよ。」

今度は背中を押された。薫の手から力強いものを感じた。
私は心のそばにいたい。心はそんなこと望んでないなんて分かってるし、すごい勝手なこと言ってるって思う。だけど、それでも心のそばにいたい。

「薫、ありがと！」

走り出す。外の風は冷たい。
自己中だよね。心が来てほしくないって言ってるのに、追いかけちゃうんだから。きっとずっと追いかけてると思う。
心が好き。だから私はこうやって追いかけてそばにいる。

心の後姿を見つけて近寄る。告白だろうとなんだろうと構わない。
心の手をとって、ぐいっと引き寄せる。
顔を見ると、目が少し涙ぐんでいた。

「葵・・？なんでここに来て・・。」

最後まで聞く前にギュッと抱きしめた
ごめん心。来てごめん。
奥にいる相手を見て息を飲んだ。

間仲だった。

かん違い

状況がよく分からない。2人でいるって事は、間仲に告白されてたって事？腕の中の心が涙ぐんでいるのは、間仲に泣かされて他たの？どうして？間仲が女の子を泣かすなんて、そんな事しないって思ってたし、思いたくない。でも実際そうなってるし・・・。心が鼻をすすっている。間仲でも心を泣かせたのは許せない。間仲は壁によりかかって足元を見ている。怒ってたり、悲しそうな表情じゃなくて、何かつらそうに目がくもっている。

「間仲、なんで・・・。」

最後まで言う前に、心がさえぎった。

「違うの葵。ちょっと間仲くんに聞きたい事があって・・・。それで私が勝手に泣いただけで、間仲くんは何も悪くないの。本当だよ？」

かばっているのか、本当なのかよく分からない。じっと心の目を見る。

「心配かけてごめんね。探してくれたんだね・・・。」

下を向いて、私の手をギュッとにぎる。何を話してたのかは言ってくれないみたい。ちょっと切なくなる。

予鈴が鳴って、間仲がなにも言わずに歩きだした。横顔がちょっと怖かった。

「あ・・間仲。」

ゆっくりと私を見てきた。とっさに目をそらす。

「ごめん。かん違いして。」

心が手を強くにぎってくるのが伝わってきた。

「いや。俺こそ・・。」

小さくため息をついて行ってしまった。声が、ちょっとだけ震えていたように聞こえた。

「葵、私たちも行こう。授業遅れちゃう。」

教室に帰ると、奈緒美が心にパンを渡した。

「食べきれなくってさ。心にあげる。」

奈緒美が食べきれないとかありえない。底なしなのに。心の口に詰めこんでいる。

薫は「お帰り。」しか言わなかった。

席に着いて間仲をちらっと見る。いつも通りの様子でなにも変わらない。なにがあったんだろう2人に。心は聞きたい事があったって言ってたけど、じゃあ・・告白とかじゃないなかったんだよね。なんで泣いてたんだ？・・・もしかして間仲の事がが好きとか？それで誰が好きなのか聞いてたとか？いや、逆か？間仲が心にしつこく聞いてて、それを私に知られたくないからとか？

全然分からない。授業中もそればかり気になって、内容が頭に入ってこなかった。

帰りのホームルームが終わりそうになった時、担任が私と間仲の名

前を呼んだ。

「あー・・クラス委員と副委員のお前らはちょっと残れ。仕事があるから。」

なにそれ!?なんで今日なの!?間仲はこっちを見ないで担任について行く。

奈緒美が肩をポンとたたいてきた。

「おつかれさん。心は責任もってあたし達が送ってくから。」

心の腕をグイッと引っぱった。

「えっ!?奈緒美?私、葵のこと待つよ!?」

手をバタバタさせてるけど、無理やり連れて行かれてしまった。

薫がため息をついた。

「また明日・・。」

なんか・・。なんだろう。きっと2人なりに色々と心配してくれているんだよね?

「おーい!早くしろー!」

廊下で担任が急かしてきた。しかたないよね?委員なんだから・・。

間仲の後ろについて歩きだす。

好きな子にしかしない

学年準備室。ここは普段使わない部屋で、今日みたいに先生や生徒達が授業で使う物を準備する部屋。
担任は「会議があるから。」って、間仲と2人で作業をしている。
お互いなにも喋らないで黙々とやっているから、すごーく気まずい。
胃が痛くなってきた。

「水原さんは聖夜祭はまた実行委員やるの？」

うわっ。びっくりした。急に話しかけてくるなよ。気まずいよりはいいけど。

「なに？聖夜祭って。」

なんだかくすぐったい名前のお祭りだなぁ。

「俺たちが今束ねてるプリント。クリスマスにやるから聖夜なんだろうね。」

渡されたのをよく見ると、12月25日のお昼からって書いてある。
でも冬休みだよね？わざわざ学校に来て、何やらされるんだろう？

「文化祭みたいなかんじ？」

プリントを返す。

「そうだろうね。でもコレは部活ごとで食べもんの屋台が中心で、クラスじゃやらないっぽいよ。部活やってないなら行かなくていい

みたいだし。」

冬休みかぁ・・。ゆっくりしたいけど、奈緒美が行きたいって言うんだろうな。クリスマスは毎年蒼佳がケーキ作って3人でやってたけど、今年はどうなんだろう。薫と奈緒美はどうするんだろう。

「間仲は委員やらないの？あっでもだれかとクリスマスは一緒にいるのか・・。」

自分で言っといて後悔した。これだと私が気にしてるみたいじゃん。

「水原さんみたいに器用じゃないから。あーでもクリスマスに野郎だけでいるのも切なすぎだよね。」

ハハッと笑って伸びをした。
器用じゃないって・・文化祭のとき普通に器用だったじゃん。それなら私のほうが不器用だ。
それに野郎だけって・・。彼女いないのかぁ。でも好きな子はいるんだよね？・・・告白しないのかな。モテるのに。
胸がキュウってなって、お互いなにも喋らなくなった。

最後のプリントをやり終わって外を見ると、夕焼け空になっていた。
間仲は担任に終わった事を言いに行ってくれている。
疲れたなぁ。机に突っ伏して目を閉じる。モヤモヤしている。
心は間仲となにを話してたんだろ。普通に聞いちゃえばいいのかもしれないけど、答えを聞くのが怖い。心は間仲が好きなの？間仲も心が好きなの？間仲は優しくていいヤツだから、心が好きになるのも分かる気がする。・・・でも泣いてたのはなんで？両思いでうれし泣きとか！？私に気を使って言えないとか・・？
やっぱりどんなに想っていても追いかけても、届かないんだな・・・

。

ゆっくり目を開けると、目の前の間仲と目があった。

「なにしてんの！！？」

飛び起きる。顔がすごく近くてなんかもうヤバかった。ちょっと動いたらくっつきそうで、心臓とび出たかと思うぐらいびっくりした。

「いや・・。呼んでも起きないから寝てんかと思って、マネしてた。」

なにその理由。訳分かんない。それより心臓の音ヤバイ。はずかしくて死にそう。

「あのさぁ、こういうの好きな子以外にやっちゃダメだよ？誤解されるよ！？」

カバンを持ってドアに手をかける。まだドキドキしてる。本当ヤダ。

「知ってるよ。」

フワリと息が耳をかすめて、体温をかんじる。間仲の髪が私の頬をくすぐった。一瞬なんなのか分からなかった。

後ろから抱きしめられていた。ビクンとこころの奥がはねる。

「知ってる。だから水原さんにしかしてない。」

ジワジワと伝わる体温。耳元でしゃべる声。間仲の心臓の音を背中

で感じる。

「な・・にこれ？」

なんで？だって間仲は好きな子いるんでしょ？心が好きなんじゃないの？なんで？なんで？これ・・どうしよう・・・。心臓がバクハツするかも。

「なにって、ちゃんと好きな子にしかしてないって事。」

するりと手をほどいて離れた。・・・好きな子。

「また明日。水原さん。」

ガラガラとドアを開けて行ってしまった。

背中で感じた間仲の心臓の音が、まだ残ってる。

告白されて

カーテンの隙間からこぼれる光がまぶしい。通りすぎていく車の音や人の声を聞きながら、ベットの中でため息をつく。
いつもなら家を出てる時間だけれど、今日はなんだか行きたくない。蒼佳に『熱っぽい。』って理由をつけて学校に電話してもらった。熱なんて本当はないんだけれど、体がだるい気がしてとにかく行きたくなかった。
目を閉じる。行きたくない本当の理由なんて分かってる。
一体どんな顔して間仲に会えばいい？きのうあんなこと言われてどうすればいいの？絶対まともな対応できないと思う。
断らなきゃ。でも、なんて言えばいい？嫌いかと聞かれても、そういう訳じゃない。ほかの男の子と間仲は違う。でも、私は心のことが好きだから間仲は好きではないんだと思う。やっぱり友達・・なんだと思う。
なんかよく分からない。間仲に告白されたとき、認めたくないけどすごくドキドキして、感じたことない気持ちになった。でも、私は心が好きだから・・。断らなきゃダメなんだと思う。
ため息をつく。
こんなグシャグシャな気持ちのまま心に会えない。『どうしたの？今日なんか変だよ？』って言われて、そんなことになったら『いやー・・じつは間仲に告られてさー。』とか？・・・・無理！！無理でしょ。なにこのノリ。
ふとんの中でうずくまる。
コンコンとドアをノックする音がした。蒼佳かな？
「葵、私だけど・・。」

心だ。透きとおった声。ベッドから抜け出してそろりとドアの前に立つ。

「具合悪いって聞いたんだけど、ちょっとだけでも顔が見たくて。」

心の声を聞いただけで胸がキュンとなる。扉の向こうに心がいる。私の好きな人。

ドアノブに手をかける。ドアを開けて心を抱きしめたい。そうしたら、きっと困った顔して笑いながら『どうしたの？』って言うんだろうな。

手を下ろしてパジャマの裾をにぎる。

「ごめん。風邪かもしれないから。」

ごめん。これ以上不安にさせたり心配かけたくない。

「そっか・・。分かった。ちゃんと寝ててね。」

階段を下りていく音が小さくなっていく。ごめんね。心・・・。なんでこんなグシャグシャな気持ちなんだろう。私は心が好き。いつも通りに断ればいいのに、なんでこんな重たい気分になるんだろう。一度フッてるから？なにか違う気がする。・・こんなの初めてだ。ズルズルとベッドの中に入る。考えすぎて頭が痛くなってきた。本当に風邪かも。

目を閉じて、うっすらとせまってくる眠気に集中する。

なんだかいいニオイがする。このニオイ知ってる。心の髪のニオイ。フワフワして花みたいで、心にぴったりだと思う。

ゆっくり目を開ける。今、何時ごろなんだろう？起き上がってギョ

ッとした。目の前に心がいた。

「あっ。もう起きて大丈夫なの？」

雑誌を見ながらお茶を飲んでいる。いつからいたんだろう。

「あー・・うん。大丈夫だと思う。・・どうしたの？」

部屋で2人きりでソワソワする。窓の外を見ると、空が暗くなりかけていた。

「どうしたのじゃないよー！心配だったから蒼佳ちゃんにお願いして入れてもらったの！」

窓ガラスにうつった、心の少し怒った顔がかわいい。

「あと授業のノート持ってきた。月曜に持ってきてくれればいいよ。」

ふり返って受けとる。心のニオイが鼻をかすめる。

「ありがとう。」

会話が途切れた。どうしよう。2人きりで胸がいっぱいで、なにを話せばいいのか思いつかない。

心がとなりに座ってきた。肩がトンと当たった。

「ねぇ、葵。」

ぷっくりした唇に目がうばわれる。

「あの・・。間仲くんとなにかあったの？」

胸がザワついた。どういうこと？なんでそんなこと聞くの？もしかして告られたの知ってるの？まさかそんな・・。

「なんで？なにもないよ。」

気持ちを落ちつかせようとするけど、全然ダメだ。どうしよう。心が不安そうな目でみている。ニコッと笑って頭をなでる。

「なにもないよ。大丈夫。」

自分に言い聞かせてるみたいだ。・・そうだよ大丈夫だよ。心じゃないヤツからの告白なんて、いつも通り断ればいい。そうだよ！なのに、なんで学校を休むほど悩んじゃってたんだろう。胸はまだザワついてる。

「2人ともー！ご飯だよー！」

下から蒼佳の呼ぶ声がした。立ち上がってドアノブに手をかける。

「ご飯だってさ。行こう。心も家に電話したほうがいいんじゃない？」

助かった。

ドアを開けようとしたら、グイッとひっぱられた。心の指が少しふるえているように見えた。

「好き」の意味

顔をのぞくと目をそらされた。

「どうしたの？」

なにも言わずに下を向いてしまった。『どうしたの？』なんて、なんてこと言っちゃったんだろう。本当は分かってる。間仲となにがあったのか知りたいんだ。でも・・・。

蒼佳がまた私たちを呼ぶ声がした。心の手を優しくほどく。

「行こう。お腹減ったでしょ？」

心が小さくうなずいた。ドアを開けて足早に階段を下りる。胸が痛かった。

席についてテーブルを見る。いつもより豪華だ。心が私の隣に座った。蒼佳がお茶の入ったカップを心に渡す。

「今日は心ちゃんの好きなものにしてみたよ。久しぶりだからね。ウチで食べてくの。あと、電話しといたよ。」

ニヤッと笑って取り分け始めた。気の利く妹だ。

「ありがとう。蒼佳ちゃん。」

たしかに心がウチで食べてくのは久しぶりだ。夏の祭り以来なんじゃないかな。あのときは買ったやつだったけど、前は3人でカレーとか作ったりしたなぁ。あの時ぐらいから、自分が料理とかできないって気づき始めたんだよね。持つべきものは、なんでもできる妹

だ。

「ねぇ、今日は泊まってくよね？心ちゃんの家にもそう言っちゃったんだけど・・。」

ちらりと私を見てきて、「お姉ちゃんも何か言って！」と言うようにうったえてきた。心を見ると、少し悩んでるみたいだった。まぁ・・ちょっと気まずいよね。

「そうしなよ。もう暗くなってるし、明日は休みなんだし。」

心を見ないで味噌汁をすする。蒼佳が私の前に座って少しにらんできたけど、気づかないフリをしてテレビのスイッチをつける。だって、どうしたらいいのさ。

「うん。じゃあそうしようかな。いただきます。」

やっぱり声がちょっと元気ない。私のせいなんだけど。ぎこちない空気が漂ったまま食事が始まった。

蒼佳は心と私の間に流れる気まずい空気を察知したのか、食べ終わって心がお風呂に入ってる時にすごく怒られた。

「何があったか分かんないけど、お姉ちゃんのこと心配して来てくれたんだよ！？なんか、いつもと違うよ。２人共。」

たしかにそうだ。蒼佳の言うとおり。私を心配してくれているのに、すごく勝手なことしてる。じゃあ、どうすればいいのさ？間仲と何があったのかそのまま話すべき？でも嫌なんだよ。知られたくない。心に「良かったね！」とか言われるのなんて嫌だし、間仲とそういうかんじだって思われるのも嫌だ。でも、なんでだろう？こんなに

ムキになってるのは、それとはちょっと違う気もするんだけど・・・。

ガチャッとリビングのドアが開いて、シャンプーのいいニオイがしてきた。

「お風呂あがったよ。お先にありがとう。」

心が戻ってきた。長い髪がしっとりと濡れていて、頬が紅く染まっている。パジャマはウチに置いてある、心専用のヤツ。首筋に、髪からしたたる雫がスッと落ちていく。

どうしよう。息が止まるかもしれない。すごく・・かわいい。思わずみとれてしまう。

「つぎ、お姉ちゃん入っちゃいなよ。」

ウチのシャンプーってこんないいにおいだったけ？心が使うと特別なんじゃないかって思う。ドキドキして、心の横を通るとき顔を見れなかった。

お風呂からあがって部屋に戻ると、心と蒼佳がフトンを敷いていた。まさかこの部屋で、3人で寝るとか言い出さないよね？

「お帰り。今日は心ちゃんとお姉ちゃんは一緒に寝てね。」

ベッドの横にフトンが1セット。

「蒼佳は？」

あーヤレヤレ・・って顔で見られた。

「あたし一応だけど受験生だからね。勉強したいの。じゃあ心ちゃん、おやすみ。」

手を振って行ってしまった。ろう下から鼻歌が聞こえてきた。
蒼佳はこの部屋にいない。・・て事は心と2人きりで夜を過ごす。
ゆっくりとふり返って心を見る。髪はもう乾いているけれど、顔はまだ紅い。昔はよく泊まったりしてたけど、高校に入ってからは初めてでパジャマ姿なんて久しぶりすぎる。
どうしよう。緊張してなにを言えばいいのか分からない。白い肌に頬がポッと鮮やかに紅く染まっている。ぷっくりとした唇に、きゃしゃな肩・・。

「葵？」

ハッと我にかえる。体中が熱くなってきた。

「も・・もう寝ようか？心はベッドで寝ていいよ。」

まだ寝るのは早すぎると思うけど、明るい所でこのまま心をみてたら何をするのか分からない。
電気を消してフトンに入る。ベッドの心に背を向けると背中あたりがモゾッとした。びっくりして電気を点けると、フトンの中に心がいた。

「な・・・なにしてんの？」

上目づかいで私を見て、フトンの中に隠れた。

「一緒に寝ちゃダメ？」

胸をギュッてつかまれた気分。鼻血でそう。・・ダメなわけない。

「ダメじゃないけど・・・。」

汗がドッと出てきた。

「じゃあいいんだね！？」

フトンから顔を出して目をキラキラさせている。そんな目で見られたら、もうなにも言えない。電気を消して、またフトンに入る。気を紛らわせようと思って、時計の針の音に意識を向けるけど、肩にふれる心の指がそれをジャマする。

今、同じフトンの中に心がいる。・・ちょっとだけなら触れても大丈夫かな？でも、もしもそれ以上の事をしちゃいそうになったら、自分を止める事ができるだろうか・・。ほんの少し手をのばす。

「ねぇ葵。」

耳元でささやく甘い声で、ゾクッと体中に響く。落ちつけ自分・・。しっかりしろ！心に伸ばした手を戻してギュッと力を入れる。

「なに？」

耳から心臓でてくるかも。

「私、葵のこと好きだよ。」

本当ならこんなに聞きたかった言葉ないと思う。だけど・・。

「私も。」

だけど私の「好き」と、心の「好き」は意味が違うから。心に「好き」って言われる程、胸がズキズキと痛くなる。

そんな事を考えながらいつの間にか眠っていた。

となり

教室のベランダでボーっとしていると、薫と奈緒美が来るのが見えた。2人は私に気づいていない。心は職員室に呼び出されて行ってしまった。早く帰ってこないかな。

朝の風は冷たくて、でもそれが心地いい。1人でこうしてると色々考えちゃうけど・・。

間仲に告白されて1日休んじゃったけど、結局なんの解決にもならなかったんだよね。いつもなら誰かに告られても、すぐ断ってなにも感じないのに間仲は違った。だから1日休んでなんでそうなのか考えたかったけど、心と一緒のフトンで寝た事で全部吹っ飛んでった。改めて私は心の事が好きなんだって思った。

間仲は・・たぶん初めての男友達で、他の男の子より仲がいいから、こんな気持ちになったんだ。・・・と思う。でも、だとしても胸のモヤモヤがスッキリしない。もっと違う理由があるような気がする。

「おはよう。」

聞き覚えのある声にドキッとする。間仲もベランダに出てきて、となりに座った。

「お、おはよう。」

声、裏返ったかも。肩があたりそうになるぐらい近くにいる。

「あのさ・・。」

白くなった息が、目の前でなくなっていく。ちゃんと、ちゃんと断らなきゃ。

「私、好きな人がいる。だから・・・その・・間仲とは付き合えない。」

言えた。ちゃんと断った。でも、なんだろう?すごい罪悪感。胸に重りがあるみたいに苦しい。

「うん。知ってる。」

間仲を見る。ボーっとした横顔でどこかを見ていて、大きくため息をついた。白くなった息が空にとける。

知ってるってどういう事?・・なんで?いつから?

頭の中がグルグルしておかしくなりそう。私が心のことを好きなのを知っている・・・。私は女の子で、心も女の子。普通じゃない。もしも、万が一誰かに言ってたらどうしよう。指先がふるえて、体がしびれてきた。どうしよう。絶対気持ち悪いって思ってる。だって普通じゃない。

「まぁ、誰にも言ってないから安心してよ。」

・・・は?

「なんで!?」

ゆっくり私を見てきた。なにを考えてるのか分からない。

「言ってほしかったの?」

心臓がゾワッてなった。目をそらす。そういう訳じゃない。・・だって普通は言うでしょ。こんな気持ち悪い話し。

「いつから知ってたの？」

間仲が知ってるってことは他の人にもバレバレなのかな。どうしよう。

「夏の祭りで家まで送ったときに、俺の背中で熱にうなされながらしゃべってたじゃん。覚えてないかぁ。」

ハハッと乾いた声で笑った。

ウソ・・。あれは夢の中で自分が思ってたんじゃないの！？まさか口に出してたなんて。・・・じゃぁ、あのとき誰かに『大丈夫』って言われた気がしたのって、あれも夢じゃなくて間仲だったってこと？あのすごく落ちついた声で、すごい安心した気持ちにしてくれたのは、間仲だったの？

手に力が入る。

「なんで知ってたのに告ってきたのさ。」

胸がギュウッてなる。間仲が本当に私のことが好きで、それで私には別に好きな人がいて、それを知ってて好きでいるってどんな気持ちだったんだろう。苦しく・・ないのかな。私だったら耐えられない。

「誰かさんに言われたんだよね。『葵のこと好きじゃないなら、近づいて優しくしないで。』って。」

『誰かさん』って・・。たぶん心だと思うけど、知らなかった。そんな話ししてたなんて。

「俺は水原さんが好きだから、近くにいたいと思うし、優しくしたいって思う。・・本当は告るつもりなんかなかったけど、俺以外にもそう思ってるヤツがいるって思うと、なんか我慢できなくってさ。」

・・ちょっと待って。俺以外にもって、心のこと言ってる？ちょっと待って。それは無いでしょ。じゃぁ誰？ってか、さっきから普通にしてるように見えるけど、私のこと・・。

「気持ち悪くないの？」

だって同姓が好きなんだよ！？ひくでしょ。なんか自分で言って変な汗出てきた。

「それなら俺だって、一回フラれてるのにまだ好きなんだよ？しかも同じ高校受けて、らしくもない副委員なんてやるし、祭りも文化祭も後追いかけるように近くにいるし。言葉にするとけっこう気持ち悪いことしてるよ？」

じっと見てきた。ドキッとする。思い返せばいつも近くにいて、助けてくれた。でも、気持ち悪いなんて思わない。

「でも、困らせてた。ごめん。学校休んだの俺のせいでしょ？」

・・違う。間仲のせいじゃない。

「諦め悪いから、しばらく水原さんのこと好きなままだと思う。でも、あんな困らせることはしないから。」

立ち上がって、カラカラとベランダのドアを開けて行ってしまった。

教室から心の声が聞こえた。
早く教室に戻らなきゃ。でも、なんだろう。なんでこんな泣きたくなってるんだろう。これでいいはずなのに、すごく悲しい。ギュウッて胸が締めつけられるみたいで、鼻がツゥンと痛い。
私は心が好き。だから他の人に告白されても断っても、なにも感じなかった。今までは。
でも今は、今まで感じたことがない感情がこみ上げてきてる。・・なんかフラれたみたいになってる。なにこれ？これじゃあ私が間仲のこと好きって思ってるみたいじゃん。
頬にあったかいものを感じた。なんで・・・なんで涙が出てくるんだろう。

こころの中にスゥッと風が吹いたような気がした。

冬の朝

冬の晴れた日はあんまり好きじゃない。空が高すぎて、澄んでいて、自分なんてホントちっぽけで無力だなって感じる。少し寂しくて不安になる。

「ねぇ、葵。ちょっと早いけどクリスマスの事なんだけど・・。」

頬がほんのり紅く染まって、毛先が朝の光に反射してキラキラ光ってる。淡い色のマフラーがよく似合ってる。

「どこか出かけない？」

毎年、心と蒼佳の3人で家でまったり過ごしてきた。今年もそうだと思ってたから、ちょっと意外だ。

「ほら、蒼佳ちゃん受験生で一人のほうが勉強に集中できるかと思って。夜はもちろん3人でご飯食べようと思ってるよ？」

2人だけでいられるなんて、すごい夢みたいでうれしい。蒼佳がすねるかも。

「うん。そうだね。どっか行こう。」

どこ行こうかな？買い物とか？それじゃいつもと変わらないか・・。せっかくならもっとキラキラしてクリスマスらしい所がいいよね？教室に行くろう下を歩いていたら、心は担任につかまって連れていかれてしまった。なんかテストがなんとかって言ってたけど・・。話しが長くなりそうだから、先に行っちゃって大丈夫かな？

中庭を渡っていたら、脚立に乗って木になにか付けてる間仲に会った。

「水原さん、おはよう。」

いつもと変わらない感じ。爽やかな笑顔。シャツ一枚だけど寒くないのかな？

「お・・おはよう。なにしてんの？」

枝から電飾っぽいのが垂れてる。

「あーコレ？ほら聖夜祭って夜だからさ、中庭中の木に付けたらけっこうキレイかと思って。俺、実行委員だから。」

知らなかった。器用じゃないって言ってたくせに、ちゃっかりやってんじゃん。

脚立にまたがってブルッと震えた。やっぱり寒いんじゃないの？

「セーターとかなんで着てないの？」

手にハァッと息を吹きかけてる。

「教室に置いてきた。動けば熱くなると思って。」

12月なのにそんなわけないじゃん。冬の朝なめてんのかな？

マフラーをはずして間仲に投げた。

「実行委員が風邪ひいたら困るでしょ？」

首がスゥッとする。寒いはずなのに、顔が熱くなってきた。・・私はきのう間仲をフッた。ホントは今日、どんな顔すればいいか分かんなかった。
でも、普通にいつも通りにしてくれてる。これでいいんだよね？同クラでギクシャクするよりは、今までと変わらなくしてる方が間仲もいいよね？
子供みたいに笑って、脚立から降りた。

「聖夜祭、来ない？」

鼻が少し赤い。そんな薄着だから・・。

「せっかくならたくさんの人に来てほしいじゃん？」

私の前に立った。間仲の顔、見られない。ドキドキする。
きっと昨日の事があったからで、それ以外の気持ちなんて無いはずなのに、胸の奥が切なくなってる。なんなの？コレ。

「マフラーありがと。でも、こういう事されちゃうと俺バカだから、ちょっと期待しちゃうよ？」

体がカッと熱くなった。期待って、いつか私が間仲を好きになるって事？ナイよ。だって心が好きなんだもん。

「私は間仲を好きになったりしない。」

間仲はまた笑った。

「そんなにハッキリ言われると、逆に清々しくなるよね。分かってるよ。そんなこと。俺が言ってるのは、まだ好きでいてもいいって

事なのかって話。」

間仲の白い息が目の前で溶けて無くなる。

なんでそんなに笑っていられるの？だって好きでいても、自分を好きになってくれるか分かんないのに。ツライだけじゃん。報われないなんて・・・。

ギュッと唇をかむ。それは私だ。今の言葉、そっくりそのまま私じゃん。私はムリだよ。間仲みたいに笑えない。心のこと好きでツライもん。なんで間仲は平気なの？

「なんでそれで平気なの？」

小さくため息をついた。

「平気じゃないよ。全然。でも、だからってそんなにスッパリ割り切れないから。ホントはダメって頭で分かっててても、気持ちはそうも上手くいかないんだよね。」

なにソレ。

「好きだから平気じゃなくても、ちょっとした事でうれしいし。さっきの聖夜祭に誘ったのもホントは水原さんに来てほしかったからで、たくさんの人なんて来なくていい。」

静かな声。私は間仲が好きになるほどイイ人間じゃない。自分のことしか考えてないのに。

「俺も教室に戻るから返すよ。ありがと。」

フワリと首にマフラーがかかる。ほんのり間仲のニオイがして、頭

の中いっぱいに広がる。
間仲の後姿から目がはなせない。なんでだろう。アイツといると変になる。ドキドキして頭の中がフワフワする。いなくなると気になるし、笑ってるのを見るとくすぐったい気持ちになる。
アイツは私にとってなんなんだろう？

変化

間仲の背中から目がはなせない。なんでだろう。アイツ私になにかしたのかな？ドキドキしてキュウってなる。

「なにしてんのさ。こんなとこで。」

声のする方を見ると、薫が窓から見ていた。深呼吸して歩き出す。今の見られてた？

「おはよう。奈緒美は？」

話題を変えよう。

「あー・・担任に呼ばれて職員室。心は一緒じゃなかったの？」

さっきのは見られてなかったのかな？

「心も職員室に呼ばれてる。」

ふぅん・・とこころない返事をされて歩き出す。冷たいサラッとした風が吹いて、薫の髪に枯れ葉がついた。

「薫、止まって。」

ハッ？て顔で見てきたけど、取ってあげると顔が少し赤くなった。いつも口悪いけど、こんな時はちゃんと女の子なんだな。ちょっとおもしろい。

「前は・・こういうのあたし達にはしなかったよね。」

薫が鏡で全体をチェックし始めた。

「やだなぁ。友達なんだから普通だよ。」

ハハッと笑って薫を見る。薫も笑っていた。良かった。なんだか薫が言う事って時々すごく当たるから怖い。

今のだってホントは薫の言うとおりだと思う。私には心が一番で、いつも心しか見れてなかった。友達ができたからそうなのかもしれないけど、心じゃない人のことも見れるようになってきた気がする。

「じゃあ間仲は？あいつも友達？だから普通にあんな事できんの？」

やっぱり見られてたんだ。手にギュッと力が入る。間仲は友達。だけど普通にできてる訳じゃない。間仲を見てると、ドキドキして気になって普通にしてるなんてできない。

「ごめん。」

薫が小さくつぶやいた。

「あんたのこと責めたいんじゃない。だけどさ、なんか前と違うし。最近心も元気ないし、あんたは間仲とばっか一緒にいるし。あたし、あんたと心はいいかんじだと思ってたから・・。」

言い終わってピタッと止まった。

「ごめん。いいかんじとか、なに言ってんだろ。気に・・しないでよね。」

薫に『ごめん』とか言われるなんて初めてな気がする。

「ありがと。」

予鈴が鳴った。バタバタと私達を通り過ぎてみんな走って行く。

「行こうか？寒いし。」

ポケットに手を入れる。薫はうなずいて少し笑った。

『間仲とばっか一緒にいるし。』か・・。そうだったのかな？そんなに一緒にいたなかな？心も元気がないって言ってた。たしかに最近いつもと違う気がしてたけど、理由がはっきり分からないから私の勘違いだと思ってた。でも、やっぱり元気なかったんだ。私なにしてるんだろう。心が元気ないときに、なにもしてあげられてないなんて。間仲のこと考えたりして、なにしてるんだろ・・。

「ねぇ、聞いてもいい？」

後ろからついて来てる薫が、おそるおそる聞いてきた。

「なに？」

いつもなら、そんな断りいれないのに。突然聞いてくるのに。

「葵は間仲が好きなの？」

ビクンと胸の奥がはねた。言われた言葉が頭の中でグルグルする。

間仲ノコト好キナノ？間仲ノコト好キナノ？・・・。

「・・分からない。」

薫はまた、ごめんと言った。後ろから先生達の声が聞こえてきて、私たちは小走りで教室に行った。ギュッと唇をかむ。

分からない？

なんで？だって私は心が好きなのに。分かってるのに、なんであんなこと言ったの？息をするのが苦しくなってきた。薫の言う事は時々すごい当たる。

私は前と違う・・？

変わらない

教室に心と奈緒美が帰ってきた。なんだか2人共すごく死にそうな顔してる。授業が終わって心の席に行く。

「担任なんだって？」

心が顔を上げた。疲れた表情でだまっている。

「補習。冬休みにやるんだって。しかもクリスマスに。ひどくない！？」

奈緒美がいつもより小さい声で教えてくれた。元が大きいから、そんなに小さな声に聞こえない。

クリスマスに補習って・・。先生たちのイヤガラセにしか思えない。

「ごめんね、葵。私からクリスマス誘ってたのに、こっちの都合でダメになって・・・。本当にごめんね。」

小さな心の体が、もっと小さくなっていってるような気がした。

ポンポンと頭をなでる。

「大丈夫だよ。補習が終わってからでも会えるだろうし。」

ずっと一緒に過ごせないのは残念だけど、会えないわけじゃないと思うし。

うん、うんと小さくうなずいて、手をにぎってきた。

「そうだよ！だってその日は聖夜祭じゃん？ずっと朝から晩まで補

習じゃないと思うから、終わったら４人で聖夜祭見て回ろうよ。ね？そうしよう？」

奈緒美が薫を揺さぶって説得してる。一瞬、薫が見てきたような気がして唇をかんだ。

「・・・いいんじゃないかな？どうせ私たちは学校にいるんだし。葵はどう？薫は用事あるなら、私と奈緒美で行ってもいいし・・。」

ニコッと心が笑った。薫は「別にいいけど」って顔でうなずいた。

「うん。行こう。」

蒼佳も呼ばないと機嫌わるくなるかな？

校門で心と奈緒美を待っている。薫はなにもしゃべらないでケータイをいじってる。ちょっと気まずい。

『間仲のこと好きなの？』

分からない。自分がなにを思ってるのか分からないのに、薫はなにをどこまで知っているんだろう。

パコンッとケータイを閉じる音がした。ちらっと見ると目が合った。

「ねぇ、朝の分からないってどういう事？」

やっぱり聞いてきた。薫に背を向ける。外は聖夜祭の準備で忙しそうだ。

「だから分からないんだって。好きじゃないと思うけど、はっきり

そうだって感じじゃない。」

自分でもなにを言ってるのか分からない。だって心が好きなんだから、他の人は嫌いなんじゃないの？
でも薫も奈緒美も嫌いじゃない。友達だから。間仲も友達だけど、2人とはちょっと違う気がする。近くにいると狂うっていうか、いつもの自分じゃなくなる。なんか心に近い。だからよく分からない。

「じゃあ、心のことは好きじゃないの？」

胸がギュッてなる。好きに決まってる。ずっと好きでここまで追いかけてきたんだから。

「前にも言ったけど、そうだとしても薫には言わないよ。」

私は言わない。他の人になんて。分かるわけないよこんな気持ち。ずっと好きでいても伝えることができないこの気持ちが、誰かに分かるわけない。
なんで薫はこんなにグイグイくるんだろう。

「好きならよそ見しないでその人だけ見なよ。・・それに気持ち変わったって誰もあんたを責めないし・・。」

なんで・・・なにを言ってるの？私が他の人を気にしてるって事？よそ見ってなに？
私が好きなのは心だよ。心しか見てないよ・・。
他に気持ち変わるって間仲にって事？ありえないよ。こんな簡単に好きになったりしない。もしそうだとしたら、私が心を好きだった時間ってなんだったの？そんな簡単に変わっちゃうほど軽い想いだったの？

キッと強く薫を見る。

「変わったりしない。」

私は心が好き。恋愛感情で。変わる事なんてできない。間仲は初めての男友達で、それだけで他の人とは違う。それだけ。

「遅くなってごめんね。2人共。」

パタパタと心が走ってくる。分かってるよ。私は幼なじみで友達で、心がそれ以上の気持ちを持つなんて事ない。分かってる。でも・・でもやっぱり好きだよ。一緒にいると、他の人には感じられない安心感とか愛しさとかを感じる。

心が走ってくる。それだけでこんなに嬉しくて切なくなってくる。

「薫、私は変わらないよ。あいつは・・間仲は友達。なんか、ごめん。」

薫が首を横にふった。

私は変わらない。

後悔

ろう下で間仲を見ても目を合わせないようにしてる。話しかけられてもすぐ終わらせてる。
どこで誰が見てるか分からない。薫みたいに私が間仲のこと好きって他の人にも思われたくないから、あんまり関わらないようにしてる。友達なんだから、しゃべるくらいはいいのかもしれないけど、念には念をってことで。間仲には悪いかもって思うけど仕方ないって自分に言い聞かせてる。

「水原さん、クラス委員のことだけど・・・。」

授業が終わって委員に行こうとした時に、また来た。

「間仲は実行委員だもんね。大丈夫だよ。心と2人で行くから。心配しないで聖夜祭の準備してよ。」

カバンを持ってろう下に出る。胸が痛い。友達なのに、こんな避けてるみたいな事して本当にいいのかな？間仲はフラれても、変わらないで普通にしてくれているのに。

「水原さん。」

ふり向くと、やっぱり間仲だった。目を合わせないように足元を見る。

「なんか最近避けられてるっぽいんだけど、俺なんかした？」

気づかれてた。こんなあからさまに態度変わったんだもん。気づく

に決まってるよね。

「そんなことないと思うけど・・・。」

言葉が出てこない。間仲も何も言ってこない。すれ違った人たちが私たちの事を見てる気がしてはずかしい。

「もしさ・・・。」

消えてしまいそうな小さな声。

「もし俺のせいで迷惑してるなら、むやみに話しかけないから。」

間仲を見る。泣きそうな顔で笑っていた。

どうしよう・・・。私、また間仲に甘えてる気がする。でも、なんて言えばいいの？間仲は悪くないのに。私の勝手でこうしてるだけなのに・・・。

「それじゃあ。引き止めてごめんね。」

きっと間仲から話しかけてくるなんて無くなっちゃうんだろうな。

これでいいんだよね？

望んでこうなったのにスッキリしない。

「葵、遅れちゃうよ？」

心が心配そうに顔をのぞき込んできた。よく分からない罪悪感を残したまま心と委員会に行った。

イスに座って話しを聞いていても、なんか頭に入ってこない。まぁ、心がノートとってくれてるから大丈夫なんだけどね。

窓の外を見ると、寒いのに実行委員の人たちが楽しそうに作業をしている。それをボーっと眺めていると、間仲もそこにいるのに気づいた。女の子たちと楽しそうに笑いながら、なんかやってる。しかも外なのに上着を着てない。
なんだアイツ・・。また薄着して風邪ひきたいのか？それにヘラヘラしてバカなんじゃない？
なんかイライラして胸焼けしてきた。間仲のバカ！アホ！お前のせいだ！なんだよ。さっきまで泣きそうな顔してたくせに、私じゃない女の子といる時は超笑顔じゃん。なにソレ。なんで私としゃべる時はつらそうだったのに、他の子とは楽しそうにしてるのさ。

鼻が痛くなってきた。・・ってかなんでこんなイライラしてるんだろう。
どうせ気づかないと思ってにらんでたら、パッとこっちを見てきて目が合った。
ヤバ・・・！
前をみた。やばい！なんでこっち見てきたんだろ。にらんでたってバレたかも。

そんな事してるうちに終了のチャイムが鳴ってしまった。全然話し聞いてなかった・・。

「葵、なにしてたの？はなし全然聞いてなかったじゃん！」

心が軽くバックをぶつけてきた。やっぱりバレてた・・。笑ってごまかしてバックをあさると、ケータイを教室に置いてきた事に気づいた。

「ごめん。先に行ってて。」

放課後はろう下も静かで変な気分。冷たい風を切って教室のドアを開ける。
「あ・・！」っと思わず声が出そうになった。
間仲が1人で外を見ていて、私に気づいてこっちを見た。間仲も「あ！」って顔になって、わざとらしく咳をした。
早歩きで自分の机に行く。中に手を入れると冷たくなってソコにあった。ホッとして立ち上がる。

「さっき俺のこと見てたでしょ。」

ふり返ると、まっすぐこっちを見ていた。
顔が熱くなっていくのが分かった。やばい・・。目をそらす。

「人間なんだから、止まってる物より動いてる物見ちゃうに決まってるじゃん。」

下手な言い訳をしてケータイをポケットにしまう。

「それより、なにサボってんのさ。早く戻って仕事しなくていいの？」

なんだろう・・。なに自分から話題フッてるんだよ！？話しかけないとか言わせといて、なにをしてるんだろう・・？

「寒いから上に着るのとって来ようと思って。水原さんは今帰り？」

なんだか胸がつっかえてる感じで、言葉が上手く出てこない。

「うん。」

早くここから出なきゃって思うけど、体が言う事を聞かない。行きたくないって、ダダをこねてるみたいたいに動かない。
なんで私は間仲といると普通じゃなくなるんだろう・・。

「そっか・・。」

そう言って私に向かって歩いて来た。
どうしよう。また前みたいに抱きしめられたら・・。すごいドキドキする。一歩も動けない。息が止まる・・。

風が私をかすめていく。

スッと横を通り過ぎて行ってしまった。ガラガラッと教室のドアが閉まる音がして、シンと静かになった。
いつもなら「またね。」とか言ってくれるのに、なにも言わないで行っちゃった。
グゥッと胸が締めつけられる。・・あたり前だよ。だって避けてるんだもん。間仲だってそうなるよ。
これでいいはずなのに、涙が出てきた。
はずかしい・・。自分から仕向けといて、いざそうなったら後悔してる自分がはずかしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2793p/

ふわふわ。

2011年10月1日12時44分発行